

# 那珂 84

— 那珂遺跡群第 177・180 次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1442 集

2022

福岡市教育委員会

# 那珂 84

— 那珂遺跡群第 177・180 次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1442 集



●那珂遺跡群

遺跡略号 NAK - 177・180

調査番号 1947・2003

2022

福岡市教育委員会



## 序

北部九州は玄界灘を介して大陸・朝鮮半島と一衣帶水の関係にあり、古代より双方の交流が絶え間なくおこなわれてきました。なかでも福岡市には、旧石器時代から近世にかけての遺跡が数多く存在します。近年の著しい都市化により失われるこれらの文化財を後世に伝えることは、本市の重要な責務です。

本書は事務所増築、共同住宅建設に伴う那珂遺跡群第177・180次発掘調査について報告するものです。この調査では弥生時代～中世の遺構・遺物が多数出土しました。これらは地域の歴史の解明のために重要な資料となるものです。今後本書が文化財保護についての理解と認識を深める一助になるとともに、学術研究の資料としてもご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、九州自動車リース様・事業者様をはじめとする関係者の方々には発掘調査から本書の作成に至るまでご理解とご協力を賜りました。心から感謝申し上げます。

令和4年3月24日

福岡市教育委員会

教育長 星子 明夫

## 例　　言

- 本書は、福岡市教育委員会が事務所増築に伴い、福岡市博多区東光寺町1丁目19番1、19番2において発掘調査を実施した那珂遺跡群第177調査の報告書である。また、共同住宅建設に伴い、福岡市博多区東光寺町1丁目14、17番において調査を実施した那珂遺跡群第180次調査の報告書である。
- 発掘調査および整理・報告書作成は、第177次は民間受託、第180次は民間受託・国庫補助事業として実施した。
- 報告する調査の基本情報は下表のとおりである。
- 本書に掲載した遺構実測図の作成は、清金良太・中園聰が行った。
- 本書に掲載した遺物実測図の作成は、清金・井上加代子・山崎龍雄・山崎賀代子が行った。
- 本書に掲載した遺構および遺物写真的撮影は、清金が行った。
- 本書に掲載した挿図の製図は、清金が行った。
- 本書に掲載した国土座標値は、世界測地系によるものである。
- 本書で用いた方位は座標北で、真北より $0^{\circ} 18'$ 西偏する。
- 遺構の呼称は、掘立柱建物をSB、竪穴住居をSC、溝をSD、井戸をSE、土坑をSK、方形周溝墓をSO、木棺墓・土坑墓をSR、甕棺墓をST、ピットをSPと略号化した。
- 遺物番号は通し番号とし、挿図と図版の遺物番号は一致する。
- 本書に関わる記録・遺物等の資料は、福岡市埋蔵文化財センターに保管される予定である。
- 本書の執筆および編集は、清金が行った。

遺跡名	那珂遺跡群	調査次数	第177次	遺跡略号	NAK-177
調査番号	1947	分布地図図幅名	東光寺	遺跡登録番号	0085
申請面積	1025.89m <sup>2</sup>	調査対象面積	141.81m <sup>2</sup>	調査面積	131.7m <sup>2</sup>
調査地	福岡市博多区東光寺町1丁目19番1、19番2			事前審査番号	2019-2-410
調査期間	令和元(2019)年10月7日～11月20日				
遺跡名	那珂遺跡群	調査次数	第180次	遺跡略号	NAK-180
調査番号	2003	分布地図図幅名	東光寺	遺跡登録番号	0085
申請面積	821.22m <sup>2</sup>	調査対象面積	305.98m <sup>2</sup>	調査面積	295.0m <sup>2</sup>
調査地	福岡市博多区東光寺町1丁目14番、17番			事前審査番号	2019-2-742
調査期間	令和2(2020)年4月8日～6月26日				

## 本文目次

I. 遺跡の立地と環境.....	1
那珂遺跡群第 177 次調査	
II. はじめに.....	7
1. 調査に至る経緯.....	7
2. 調査の組織.....	7
III. 調査の記録.....	9
1. 調査の概要.....	9
2. 遺構と遺物.....	9
1) 掘立柱建物 (SB) .....	9
2) 竪穴住居 (SC) .....	10
3) 井戸 (SE) .....	12
4) 土坑 (SK) .....	17
5) 土坑墓 (SR) .....	17
5) 壺棺墓 (ST) .....	18
3. 小結.....	24
那珂遺跡群第 180 次調査	
IV. はじめに.....	27
1. 調査に至る経緯.....	27
2. 調査の組織.....	27
V. 調査の記録.....	29
1. 調査の概要.....	29
2. 遺構と遺物.....	29
1) 溝 (SD) .....	29
2) 井戸 (SE) .....	30
3) 土坑 (SK) .....	30
4) 方形周溝墓 (SO) .....	31
5) 土坑墓・木棺墓 (SR) .....	33
6) 壺棺墓 (ST) .....	36
7) その他の遺物.....	47
3. 小結.....	47
VI. 結語.....	49

## 挿図目次

第1図 那珂遺跡群位置図 (1/25,000) .....	2
第2図 那珂遺跡群調査区位置図 (1/7,500) .....	3
第3図 第177・180次調査区位置図 (1/2,000) .....	4
<b>那珂遺跡群第177次調査</b>	
第4図 調査区全体図 (1/100) .....	8
第5図 SB009-068 実測図 (1/80) およびSB068 出土遺物実測図 (1/3) .....	10
第6図 SC040-056 実測図 (1/80) および出土遺物実測図 (1/3) .....	11
第7図 SC033-067 実測図 (1/80) および出土遺物実測図 (1/3) .....	12
第8図 SE039 実測図 (1/80) および出土遺物実測図 (1) (1/3) .....	13
第9図 SE039 出土遺物実測図 (2) (1/4、1/6) .....	14
第10図 SE039 出土遺物実測図 (3) (1/4) .....	15
第11図 SE039 出土遺物実測図 (4) (1/4) .....	16
第12図 SK025-049-095 実測図 (1/60) .....	17
第13図 SR051-052-057 実測図 (1/60) .....	17
第14図 ST028-032-042 実測図 (1/30) および出土遺物実測図 (1/8、1/10) .....	19
第15図 ST043-061 実測図 (1/30) および出土遺物実測図 (1/10) .....	20
第16図 ST062 実測図 (1/30) および出土遺物実測図 (1/3、1/10) .....	21
第17図 ST063-074-075 実測図 (1/30) および出土遺物実測図 (1/8、1/10) .....	22
第18図 ST078-087-100 実測図 (1/30) および出土遺物実測図 (1/8、1/10) .....	23
<b>那珂遺跡群第180次調査</b>	
第19図 調査区全体図 (1/150) .....	28
第20図 SD001 実測図および出土遺物 (1/3) .....	30
第21図 SD020 実測図 (1/60) および出土遺物 (1/3、1/4) .....	31
第22図 SE007 実測図 (1/40) および出土遺物 (1/3) SK012-015-017-046 実測図 (1/40, 1/60) .....	32
第23図 SO008 実測図 (1/60) .....	33
第24図 SO008 出土遺物実測図 (1/1、1/3、1/4、1/8) .....	34
第25図 SR019 実測図 (1/30) および出土遺物実測図 (1/1) .....	35
第26図 SR028 実測図 (1/30) および出土遺物実測図 (1/3) .....	35
第27図 ST004-005 実測図 (1/30) および出土遺物実測図 (1/10) .....	37
第28図 ST006 実測図 (1/30) および出土遺物実測図 (1/10) .....	38
第29図 ST011-013-014-018 実測図 (1/30) および出土遺物実測図 (1/8、1/10) .....	39
第30図 ST023-024 実測図 (1/30) および出土遺物実測図 (1/10) .....	41
第31図 ST025-026 実測図 (1/30) および出土遺物実測図 (1/8、1/10) .....	42
第32図 ST027-030-034 実測図 (1/30) および出土遺物実測図 (1/8、1/10) .....	43
第33図 ST042 実測図 (1/30) および出土遺物実測図 (1/10) .....	45
第34図 ST044-045 実測図 (1/30) および出土遺物実測図 (1/8、1/10) .....	46
第35図 ピット出土遺物実測図 (1/3) .....	48
第36図 那珂遺跡群第177・180次調査および平板測量図 (1/400) .....	50

## 図版目次

### 那珂遺跡群第177次調査

- 図 版1 (1) 第177次全景(上空から)  
(2) 第177次南側全景(東から)  
(3) SB068(西から)  
(4) 壺穴住居出土状況(上空から)  
(5) SC040石包丁出土状況(南東から)  
(6) SE039遺物出土状況(東から)
- 図 版2 (1) SE039(東から)  
(2) SK025(東から)  
(3) SR051(南から)  
(4) SR052(東から)  
(5) SR057(東から)  
(6) 墓植墓(上空から)
- 図 版3 (1) ST028(東から)  
(2) ST032(東から)  
(3) ST043(東から)  
(4) ST062(北から)  
(5) ST087(西から)  
(6) ST100(西から)
- 図 版4 出土遺物(1)
- 図 版5 出土遺物(2)
- 図 版6 出土遺物(3)
- 図 版7 出土遺物(4)

### 那珂遺跡群第180次調査

- 図 版8 (1) 第180次全景(上空南から)  
(2) ST026・034・042(上空南から)  
(3) ST006・023・024・030・044(上空南から)
- 図 版9 (1) SD001A断面(東から)  
(2) SD001B断面(東から)  
(3) SD020断面(南から)  
(4) SE007(東から)  
(5) SK012断面(北西から)  
(6) SO008(上空南から)
- 図 版10 (1) SO008A断面(南から)  
(2) SO008B断面(西から)  
(3) SO041(北から)  
(4) SR019(東から)  
(5) SR019勾玉出土状況(西から)  
(6) SR019勾玉出土状況(南西から)
- 図 版11 (1) SR019管玉出土状況(西から)  
(2) SR028(東から)  
(3) ST004(南から)  
(4) ST005(西から)  
(5) ST006(南東から)  
(6) ST006(北東から)
- 図 版12 (1) ST011(南から)  
(2) ST013(北から)  
(3) ST014(北から)  
(4) ST018(東から)  
(5) ST023(北東から)  
(6) ST024(西から)
- 図 版13 (1) ST025(東から)  
(2) ST026(東から)  
(3) ST030(南から)  
(4) ST034(南東から)  
(5) ST042(東から)  
(6) ST044(北から)
- 図 版14 出土遺物(1)
- 図 版15 出土遺物(2)
- 図 版16 出土遺物(3)
- 図 版17 出土遺物(4)
- 図 版18 出土遺物(5)

## 表 目 次

### 那珂遺跡群第 177 次調査

第1表 SE039 出土木器一覧 ..... 15

第2表 那珂遺跡群第 177 次調査出土甕棺一覧 ..... 24

### 那珂遺跡群第 180 次調査

第3表 那珂遺跡群第 180 次調査出土甕棺一覧 ..... 48

第4表 那珂遺跡群第 177・180 次出土甕棺法量 ..... 49

## I. 遺跡の立地と歴史的環境

那珂遺跡群は福岡平野のほぼ中央に位置している。三方を三郡山系や背振山系から延びる山塊に囲まれ、北側に隣接する比恵遺跡群と共に東側は御笠川、西側は那珂川に挟まれた丘陵上に位置する遺跡である。その両河川の間には観音山や牛頭から派生して断続的に長く伸びる洪積台地が形成されている。比恵遺跡群とは浅い谷によって区分されている。那珂遺跡群の立地する丘陵は、かつての沖積作用によって細かい開析谷が複雑に入り込む丘陵である。また、この台地の南側は春日丘陵と連なり、比恵遺跡群、井尻遺跡、五十川遺跡、さらに南には須玖岡本遺跡を中心とした遺跡が広がる。比恵・那珂遺跡群の立地する台地は花崗岩の風化礫層を基盤に、その上に粗砂、細砂、腐食土層、阿蘇山の火碎流による八女粘土層・鳥栖ローム層が形成される。今回報告する那珂遺跡群第177・180次調査では鳥栖ローム層上面から遺構検出を行っている。

比恵・那珂遺跡群において、初めに遺構が確認されるのは弥生時代前期であるが、後期旧石器時代のナイフ型石器や彫器が台地辺縁の比恵第19次、那珂第38・41次調査で検出されている。縄文時代も同様であり、前期の深鉢が比恵第30次調査から出土しているが、散逸的な分布にすぎない。

これが弥生時代に入ると一変し、台地の縁辺部で竪穴住居や貯蔵穴といった遺構が拡がりをみせ、開析谷に面した斜面上には土器・石器・木器などを伴う包含層が形成される。那珂第37次調査では夜白期から前期前半の2重環濠が營まれており、これに連続する時期に那珂第67次調査でも環濠と多数の土坑墓が造営されている。比恵遺跡群では北西部を中心に、貯蔵穴などが見つかっている。

弥生時代中期に入ると竪穴住居・貯蔵穴等が各地に広がると共にこの頃から甕棺墓の形成も始まる。

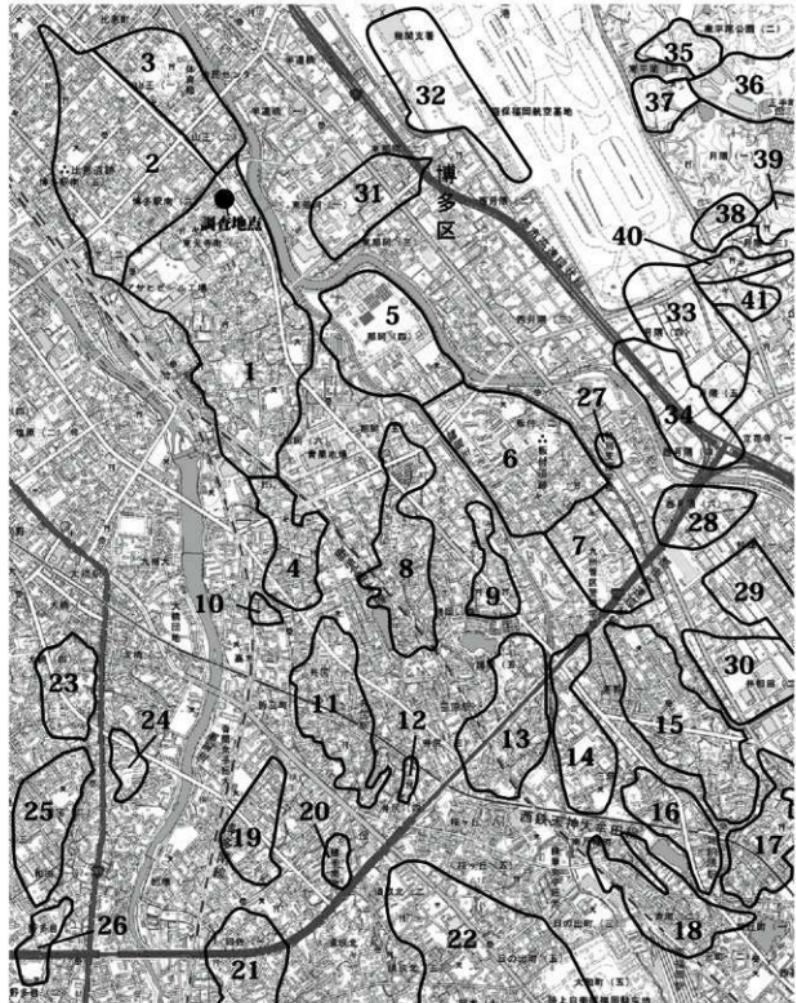
中期後半からは竪穴住居や井戸を伴う集落が拡がりを見せる。那珂67次調査では弥生中期中頃から後半の多数の甕棺墓が検出されている。また、那珂153・154次調査では弥生時代中期末から後期前半になると、2段掘りの大型溝が掘削されており、集落の環濠か、区画溝と推定されている。比恵第58次などで検出された南北方向の区画溝が縱断し、その周辺には掘立柱建物が配置され、青銅器生産関連遺物や舶載金属器が多く出土している。那珂第177・180次調査では甕棺墓・土坑墓・木棺墓・周溝墓などが多数検出された。

那珂丘陵中央の尾根線上の最高所には、福岡平野では最も古い時期の前方後円墳である那珂八幡古墳が築かれ、主体部には木棺内に三角縁神獣鏡や玉類が副葬されていた。

古墳時代後期には劍塚北古墳の造営を契機として、阿蘇凝灰岩製の石屋形をそなえた横穴式石室を持つ前方後円墳である東光寺劍塚古墳が位置している。このうち、東光寺劍塚古墳は全長140m、3重の周溝をもつ筑前地域最大級の古墳である。また、古墳時代後期後半以降、大型の掘立柱建物や柵列が見つかっており、日本書紀宣化天皇元年(536年)条にみえる「那津官家」との関連が指摘されている。また、北側に位置する比恵遺跡群についても那珂遺跡群と同様に、少し遅れて掘立柱建物群が確認されている。那珂遺跡群第19・24次等ではこのころ出土する初期瓦は、比恵遺跡群では出土せず、掘立柱建物との関連が指摘されており、那珂遺跡群では寺院・官衙遺構が營まれている。

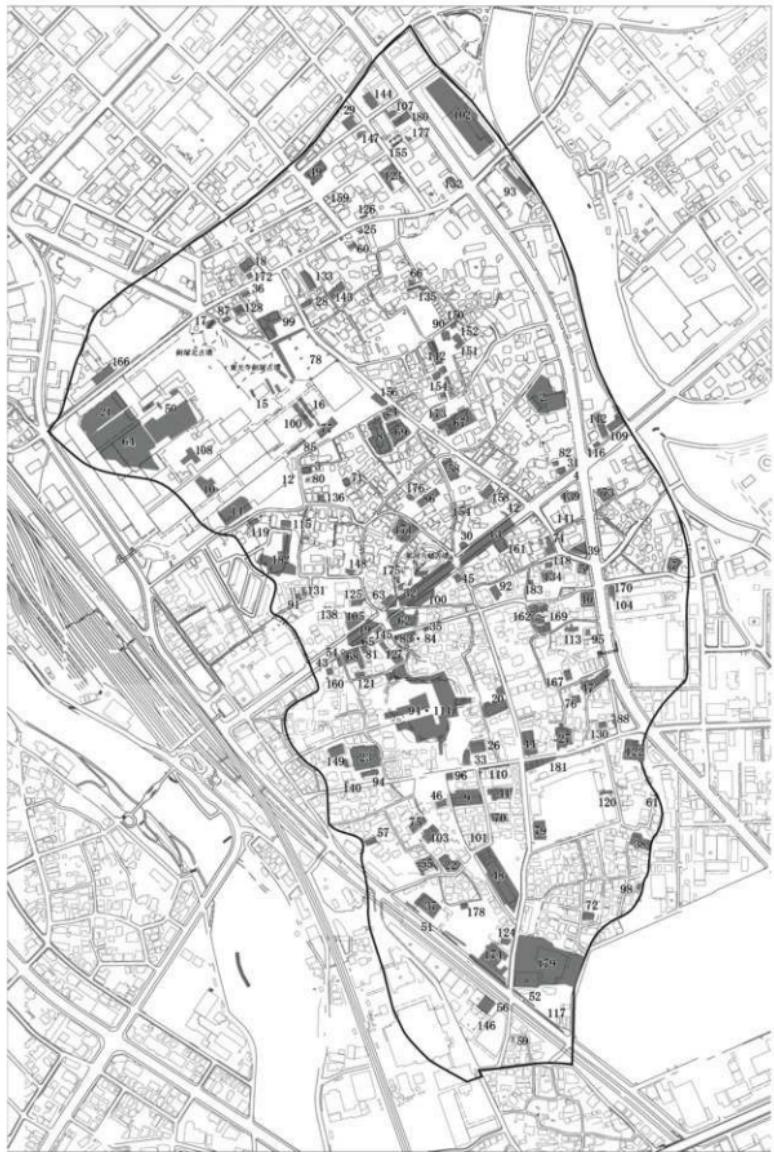
古代以降、比恵遺跡群で確認できる遺構の数は激減しており、集落の中心は那珂遺跡群に移行する。

比恵・那珂遺跡群周辺の遺跡では、板付遺跡があり、日本最古の水田遺跡、弥生時代前期の環濠集落などがあり、弥生時代前期末の甕棺墓から細形銅劍・銅矛が出土している他、弥生時代後期の竪穴住居からは小銅鐸が出土し、国指定史跡となっている。さらに南側の井尻遺跡では弥生時代の集落と甕棺墓が検出され、青銅器生産関連遺構やガラス勾玉鑄型が出土し、工房があったとされている。

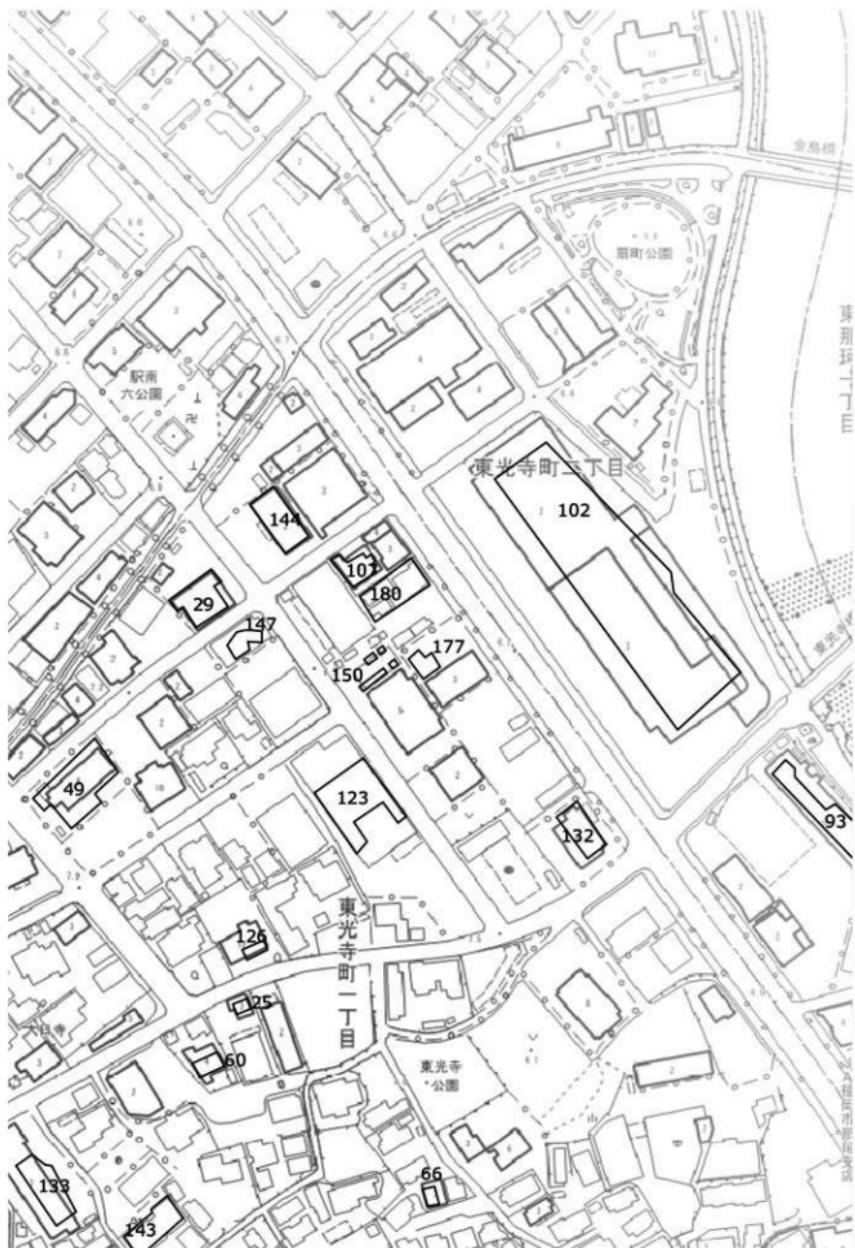


1. 那珂道路群
  2. 比恵道路群
  3. 山王道路
  4. 五十川道路
  5. 那珂君休道路
  6. 板付道路
  7. 高畠道路
  8. 諸岡A道路
  9. 諸岡B道路
  10. 井尻A道路
  11. 井尻B道路
  12. 井尻C道路
  13. 蓬原道路
  14. 三筑道路
  15. 麦野A道路
  16. 麦野B道路
  17. 麦野C道路
  18. 南八幡道路
  19. 横手道路群
  20. 寺鳥道路
  21. 日の出町
  22. 佐野道路
  23. 大橋E道路
  24. 三宅B道路
  25. 三宅C道路
  26. 野多目A道路群
  27. 板付東道路
  28. 井相田D道路
  29. 仲島道路
  30. 井相田C道路
  31. 東那珂道路
  32. 猶雀道路
  33. 下月隈C道路
  34. 立花寺B道路
  35. 久保園道路
  36. 施田大谷道路
  37. 宝満尾道路
  38. 天神森道路群
  39. 下月隈A道路群
  40. 下月隈B道路群
  41. 上月隈道路群
- 177・180次調査地点

第1図 那珂遺跡群位置図 (1/25,000)



第2図 那珂遺跡群調査区位置図(1/7,500)



第3図 第177・180次調査区位置図(1/2,000)

## 那珂遺跡群第 177 次調查



## II. はじめに

### 1. 調査に至る経緯

福岡市教育委員会は、同市博多区東光寺町1丁目19番1、19番2における事務所建設事業に伴う埋蔵文化財の有無についての照会を令和元（2019）年7月18日付で受理した。

これを受け埋蔵文化財課事前審査係は、申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である那珂遺跡群に含まれていること、確認調査が実施され現地表面下約50cmで遺構が確認されていることから、遺構の保全等に関して申請者と協議を行った。

その結果、埋蔵文化財への影響が回避できないことから、事務所増築事業で遺跡が破壊される部分について記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。

その後、令和元年10月3日付で九州自動車リース株式会社を委託者、福岡市長を受託者として埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結し、同年10月7日から発掘調査を、令和2・3年度に資料整理、報告書作成をおこなうこととなった。

### 2. 調査の組織

調査委託：九州自動車リース株式会社

調査主体：福岡市教育委員会

（発掘調査：令和元年度・資料整理・報告書作成：令和2・3年度）

調査総括：経済観光文化局文化財活用部埋蔵文化財課 課長 菅波正人

同課調査第1係長 吉武 学（元年度）

同課調査第2係長 藏富士寛

庶務： 文化財活用課管理調整係 松原加奈枝（元・2年度）

井手瑞江

内藤 愛

事前審査： 埋蔵文化財課事前審査係長 本田浩二郎（元・2年度）

田上勇一郎

同課事前審査係主任文化財主事 田上勇一郎（元・2年度）

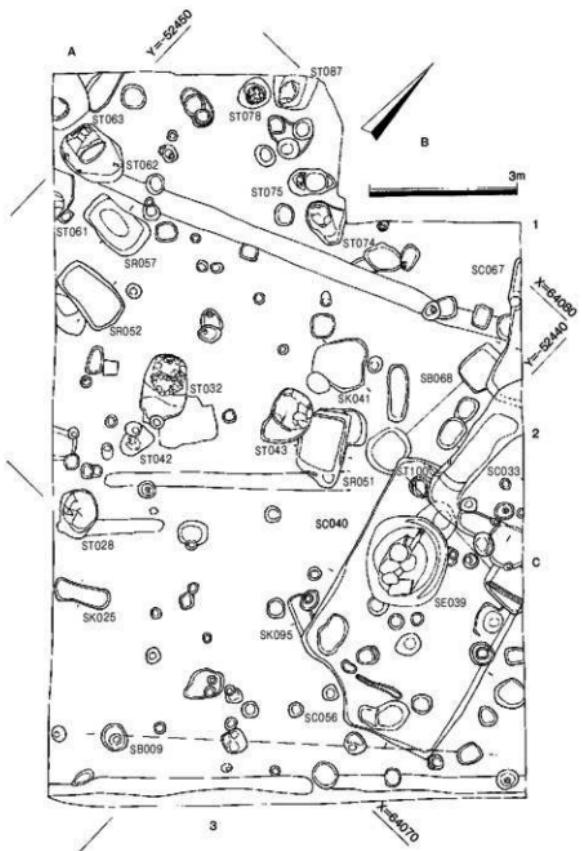
森本幹彦

同課事前審査係文化財主事 朝岡俊也（元年度）

山本晃平（2・3年度）

調査担当： 埋蔵文化財課文化財主事 清金良太

その他、発掘調査に至るまでの条件整備、調査中の調整等について九州自動車リース株式会社様をはじめとする皆様には多大なご理解とご協力をいただき、調査が円滑に進行し無事に終了することができました。ここに深く感謝致します。



第4図 調査区全体図(1/100)

### III. 調査の記録

#### 1. 調査の概要

今回報告する那珂遺跡群第177次調査区は、博多区東光寺町1丁目19番1、19番2に所在し、調査前の現況は標高約7.3mを測る駐車場であった。調査地点は遺跡の北東側に位置し、隣接する北側では107次、180次、西側では第150次、東側では第102次調査が実施され、更にその周辺でも数多くの調査が進んでいる。

本調査区はアスファルトおよび客土のはば直下、標高6.6m前後で遺構面である鳥栖ローム層が広がり、遺構面は全体的にフラットである。遺構面に切り込むように、宅地化以前の耕作地の造成に伴うものと推測される溝が東西に走る。遺構が当初の想定以上に検出されたため、排土の置き場がなく、調査区内の一部を図面、写真撮影を終えたのち、排土置き場として利用した。

遺構検出は遺構面上までを重機で剥ぎ取って実施したが、以下は人力によって作業を行った。今回の調査では、弥生時代中期以降の掘立柱建物や竪穴住居、土坑墓、甕棺墓等を主体として確認できたが、古代のピットや中世の井戸も散見する。出土遺物量は、コンテナケースにして23箱である。

発掘調査は令和元年（2019）年10月7日に着手した。まず、発掘機材やリース機材を搬入し、翌日に重機による表土剥ぎ取りから開始した。その後10月9日から、壁面清掃、遺構面保護、世界測地系によるトラバース杭の設定等を実施し、遺構検出を開始した。順次、南側から検出遺構の掘り下げや写真撮影、1/20縮尺を主体とする図化、遺物取り上げ、周辺測量等の作業を進め、排土置き場の関係から11月6日に南側の一部全体写真の撮影を行い、排土置き場とした。その後、甕棺掘削、図化や個別遺構写真撮影を行い、11月13日に高所作業車を使用して全体写真撮影を行った。残る甕棺の図化作業、取り上げ、片付け、重機による埋め戻し等を終え、11月20日に第177次調査を完了した。

なお、調査対象面積は、141.8m<sup>2</sup>であったが、既存建物から距離を取ったため、今回実際に作業を行った面積は131.7m<sup>2</sup>であった。調査時の遺構番号は、001から3桁の通し番号を遺構の種別に関わらず付した。それらの番号には、欠番があるものの、重複はない。以下の報告にあたっても、原則的に調査時の遺構番号を用い、例言に記した遺構略号と組み合わせて記述するが、掘立柱建物を構成する柱穴や竪穴住居内の施設については、報告の便宜上必要に応じて遺構毎にP1から順に番号を付した。

#### 2. 遺構と遺物

以下、遺構種別ごとに報告を行うが、調査区での遺構位置を本文中に示す際には、調査時における世界測地系による10m単位の平面座標を基準とした英字（西から東にA～C）と数字（北から南に1～3）の組み合わせによるグリッド表記を用いる（第4図参照）。

##### 1) 掘立柱建物 (SB)

以下、調査区の南、東側で確認した掘立柱建物2棟について報告する。

SB009（第5図）調査区南のB C - 2・3区に位置する4間の建物である。対応する柱穴は調査区外に伸びる。柱間は約2.4mを測る。柱穴はP2が一辺0.45mの隅丸長方形であるが、他は径約0.5mの円形を呈し、深さ0.3～0.4mを測る。須恵器片が出土したが、小片で実測できなかった。

SB068（第5図）調査区のB C - 2区で確認した。建物方位はほぼ座標北か、座標北に直行する。また、P1～P4はそれぞれ竪穴住居に切られる。柱間は1.8～2.6mで、柱穴は隅丸長方形を呈する。規模は一辺約0.7～1.0mを測る。P3、4はほぼ全て竪穴住居に切られるが、他は深さ約0.7～0.8mを測る。埋土は黒褐色土に少々ロームが混じっていた。

出土遺物（第5図）1はP1出土の壺で口縁部のみが残る。器面は風化が著しい。弥生時代後期初頭に位置づけられる。

## 2) 壺穴住居 (SC)

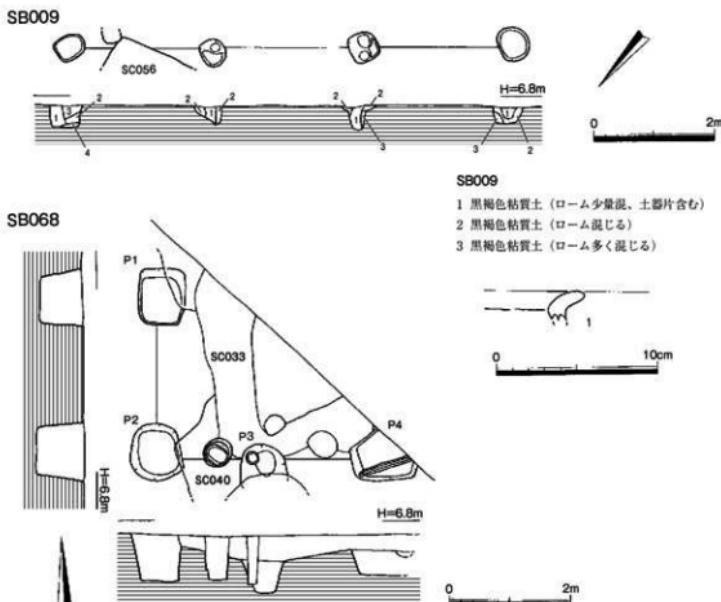
調査区の東側において壺穴住居4軒を確認することができた。4軒全て切合っており、調査区外に伸びる壺穴住居が多い。また、近い時期に建て替えられたようである。

SC040（第6図）BC-2区で検出した。SC056を切り、SC033に切られる。南北の長さは約4.7m、東西の長さは約3.6mを測り南北方向にやや長い長方形プランを呈する。コーナーは隅丸にカーブし、壁面の高さは0.2m程度で、土層観察では2層が貼床である。床面では南側に窪み状の壁溝が確認できる。主柱穴は4本確認できた。古墳時代前期初頭。

出土遺物（第6図）2～5は土器師である。2は豊前系の壺である。他の遺物と比較すると色調が暗い。口径約24.2cmである。3は壺もしくは壺の底部である。4は高杯の脚部。5は器台である脚部下に穿孔が5か所確認できる。6は頁岩製の石包丁で厚さ1.0cm、幅12.9cmである。7は泥岩の砥石で、厚さ2.5～2.9cmである。

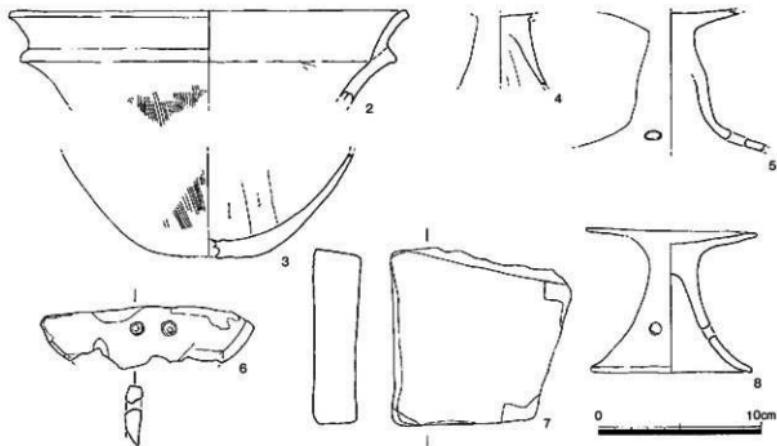
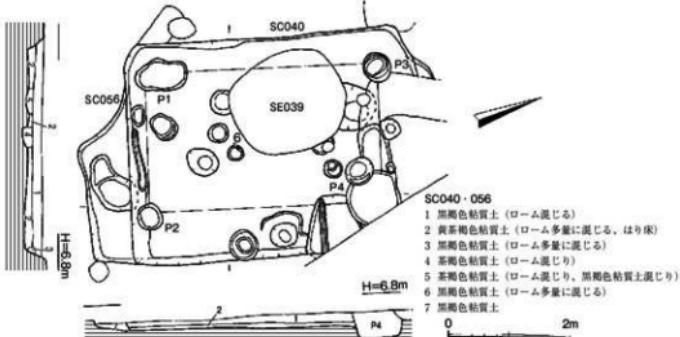
SC056（第6図）C-2区で検出した。SC040に切られており、一部分しか残っていない。西側の壁は直角ではなく斜めに走っており、住居ではない可能性も否定できないが、SC040の東壁にはSC056の壁溝の残存と考えられる部分が確認できる。復元の規模は南北3.8m、東西1.9m、壁面の高さは0.1mである。

出土遺物（第6図）8は器台で脚部中位に穿孔が3か所確認できる。



第5図 SB009・068 実測図(1/80)およびSB068出土遺物(1/3)

## SC040・056



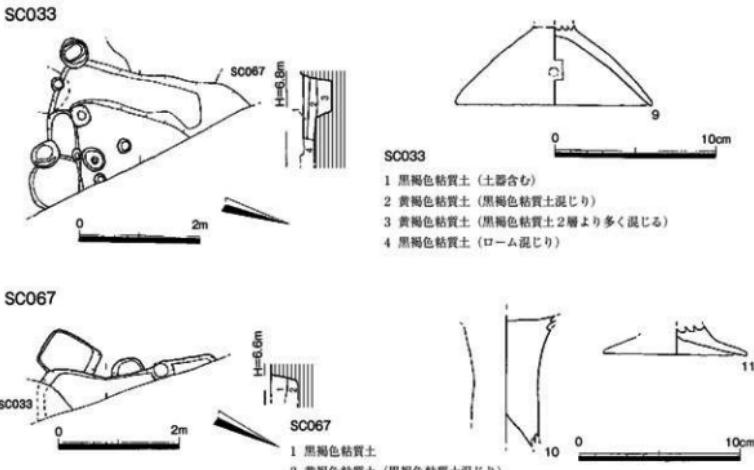
第6図 SC040-056 実測図(1/80)および出土遺物実測図(1/3)

SC033（第7図）BC-2区で検出した。SC040、067を切る。今回の調査では、一番新しい堅穴住居であるが、規模は大部分が調査区外に伸びるため不明である。壁溝が幅0.6m、深さ0.47mと大きく深い。壁面の高さは約20cmである。

出土遺物（第7図）9は土器器で精製土器の器台である。破片であるが、1か所穿孔が確認でき、底径約12.0cm。

SC067（第7図）BC-1・2区で検出した。SC033に切られる。西側の一辺は約2.9m、深さ0.42mである。SC033のように、壁溝が大きく深いタイプの可能性がある。

出土遺物（第7図）10、11は土器器である。10は高坏で脚部のみが残る。11は精製土器、鉢の脚



第7図 SC033・067 実測図(1/80)および出土物実測図(1/3)

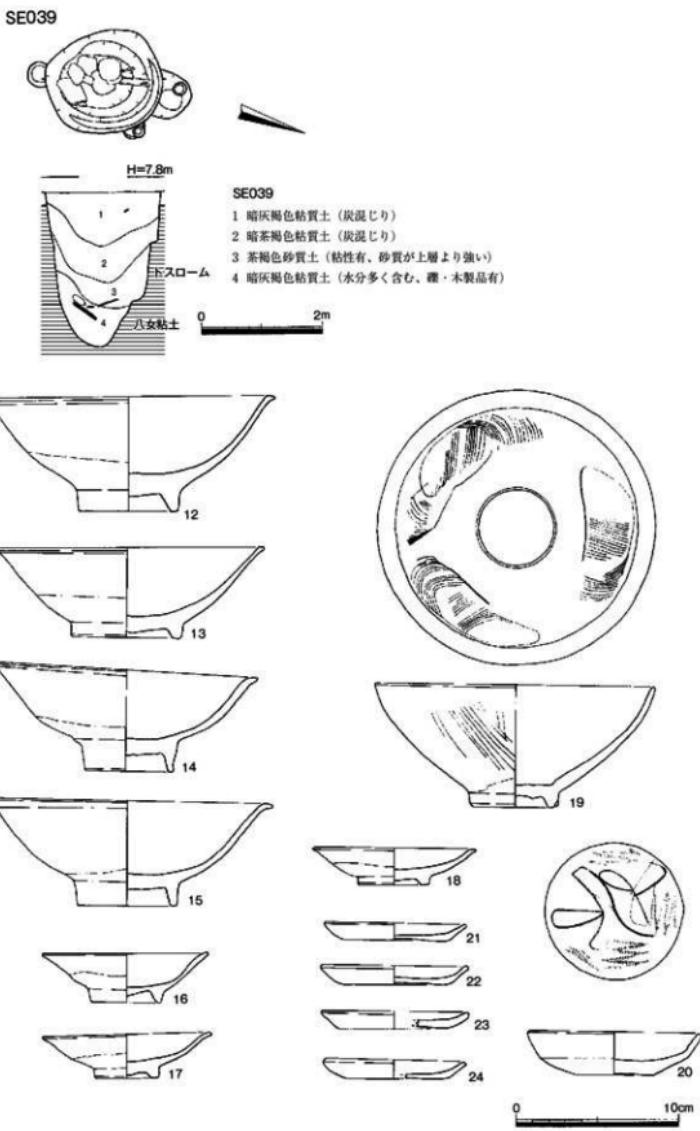
部である。底径 8.8cm を測る。

### 3) 井戸 (SE)

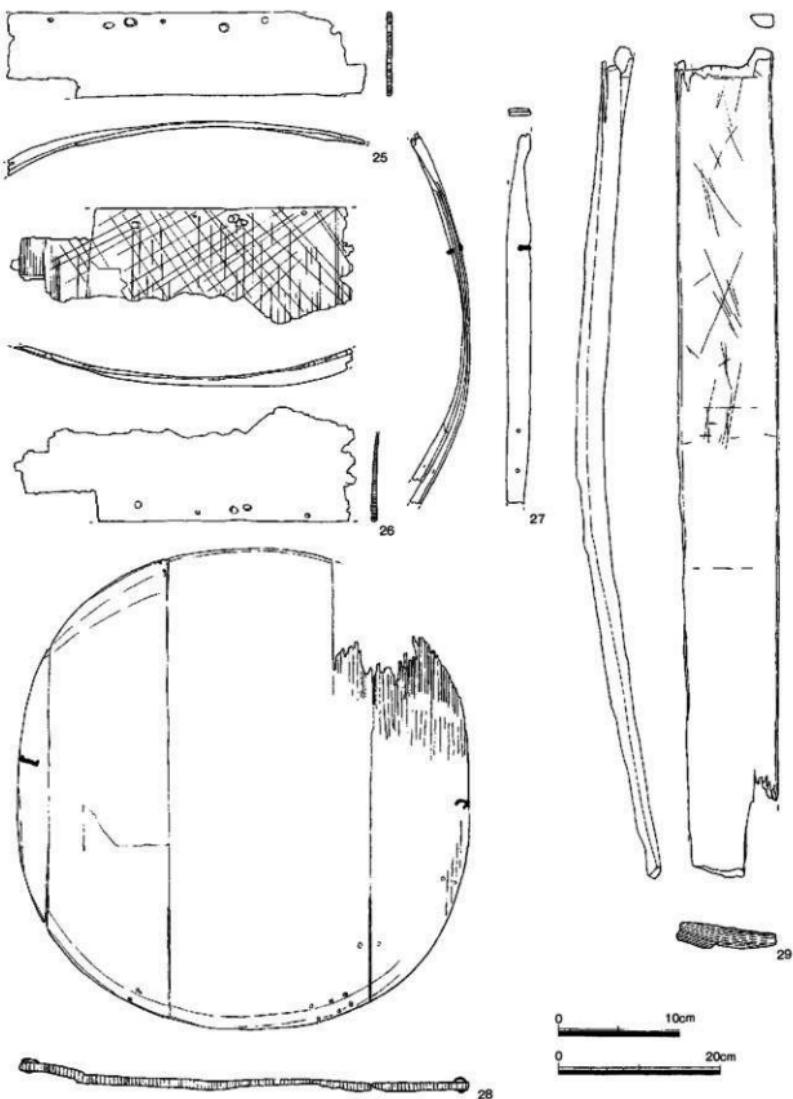
SC040 を切るように中世（12世紀後半）の井戸が1基検出された。周囲に埋土が同じピットがあり中世の集落が広がっていた可能性がある。

SE039（第8図）B C - 2区で検出した。径は 1.92 m、深さ 2.54 m の井戸である。井戸の底から湧水した。SB068、SC040 を切る。上部の 1 層は近代の陶磁器片と共に須恵器片が混じっていた。2 層はほぼ何も確認されず、3・4 層から 12 世紀中頃から後半の磁器が木器と共に確認された。断面図を見ると 2・3 層で階段状になっており、掘削当時の痕跡ではないかと考えられる。

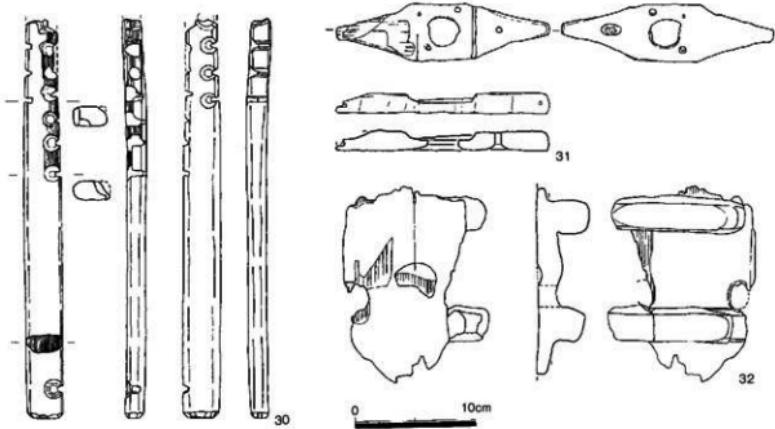
出土遺物（第8、9、10、11図）12～15は白磁の碗である。16～18は白磁の皿である。碗・皿共に、いずれも内面から外面上部にかけて施釉し、外面下部から底部にかけては露地である。13、16は内面に施釉後に剥ぎ取られており、重ね焼きの痕跡が確認できる。19、20は同安窯系の青磁である。19は碗で口径 17.1cm、底径 5.2cm、高さ 7.4cm である。内面と底部付近を除いて施釉されている。内外面共に範により文様を施す。20は皿である。高台は無く、底部以外を施釉する。文様は内面にみられ、範による文様と櫛点描文を施す。21～24は土器の坏である。25～41は木器である。他にも出土したが、紙幅の関係で掲載していない。25～28は曲物である。25、26は曲物の側板である。一辺に穴が 5～6 か所空いており、樹皮で他の部材と結合したと考えられる。27は 28 の上で検出された。厚さ 0.3cm ほどの薄い板を 2 枚重ねて貼り合わせている。また他の部材と結合するための穴が 3 か所ありそのうち 1 か所には樹皮が残っていた。28は曲物の底部である。厚さ 0.7cm、幅 36.8cm である。側板を乗せたと考えられる痕跡がある。また、他の部材と結合するための穴が 6 か所（7 か所か）確認でき、そのうち 3 か所には樹皮が残る。29は井戸枠に使用したものであろうか。厚さ 3.7cm の板材で一方にはホゾが確認できる。30は火鑶臼である。残存長 32.7cm、幅 3.1cm、厚さ 1.8cm である。表に 8 か所、裏に 3 か所の穴が確認でき、端部は丁寧に面取りする。31は糸巻部材である。穿孔も



第8図 SE039 実測図(1/80)および出土遺物実測図(1)(1/3)



第9図 SE039 出土遺物実測図 (2) (29は1/6、他は1/4)

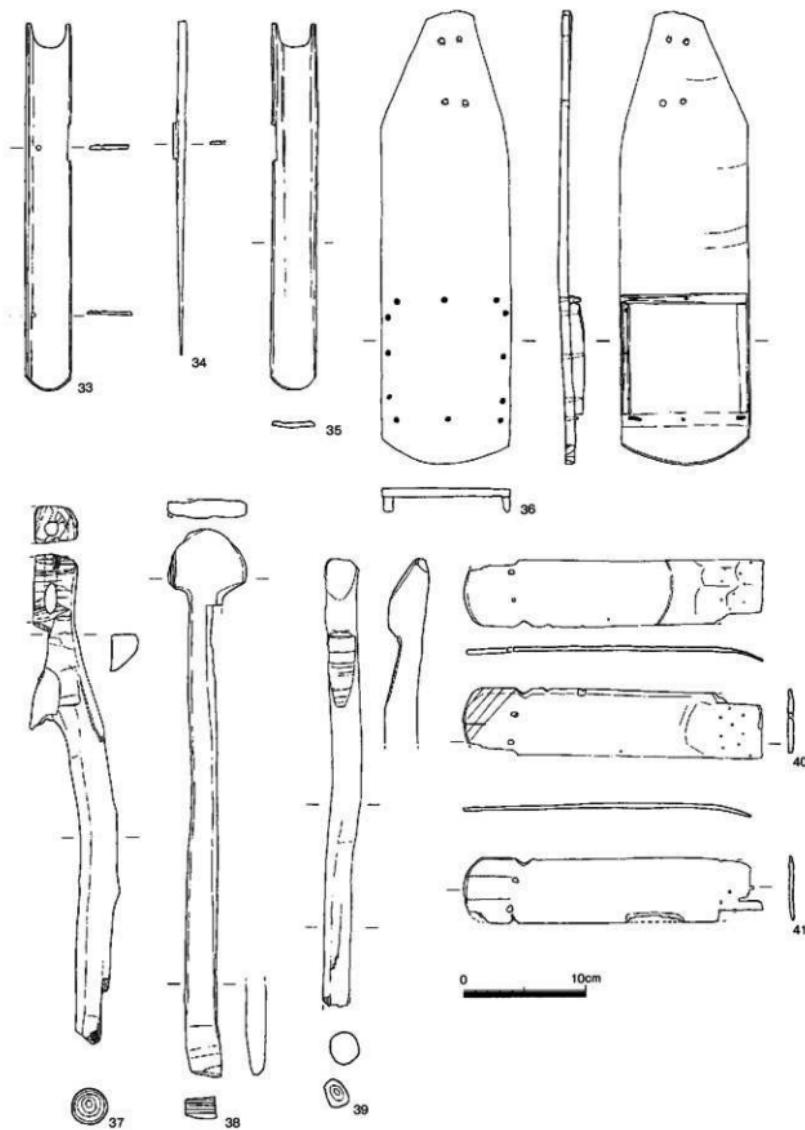


第10図 SE039出土遺物実測図(3)(1/4)

確認できる。中心の大きい穴は径約2.5cm。その他小さい穿孔が6か所認められる。32は下駄である。鼻緒を通す孔が2か所に確認できる。33～39は用途不明木器である。33～35は一連の木器で33と35は凸凹が組み合って出土した。36は木釘を12本使用し他の板材と組合せている。また4か所に穿孔が確認できる。37、39は芯持材を使用する。40、41は板材の一部を抉り、短辺の片方は丸く、もう一方は直線的で、全体よりもさらに薄く仕上げる。

番号	名称	規格(cm)	木材組織	その他
25	曲物(側板)			穿孔7ヶ所
26	曲物(側板)			穿孔5ヶ所、内面に格子状の線
27	曲物			穿孔3ヶ所、1ヶ所樹皮が残る
28	曲物(底板)	39.2×36.8×0.7	柾目材	穿孔6ヶ所(7ヶ所か)、5ヶ所に樹皮残る
29	板状木材(井戸材か)	(102.7)×12.8×3.2	板目材	大きく反る、端部にホゾ
30	火鉢臼	32.7×3.1×1.8	柾目材	穴は表8ヶ所、裏3ヶ所
31	糸巻	17.4×4.9×1.6	柾目材	穿孔7ヶ所(2ヶ所貫通せず)
32	下駄		柾目材?	径1.6～2.0cmの穿孔2ヶ所(3ヶ所か)
33	不明木器(板材)	29.9×3.7×0.3		穿孔2ヶ所
34	不明木器(板材)	(27.1)×(1.1)×0.3		33、35と凸凹の関係
35	不明木器(板材)	29.9×3.7×0.5		穿孔は確認できない
36	不明木器	36.8×10.5×0.8	板目材	12本の木釘で結合、4ヶ所穿孔
37	不明木器	39.5×2.8	芯持材	上部に径1.1cmの穿孔、もう1ヶ所穿孔されていたか。
38	不明木器	44.5×6.4×1.8	柾目材	下部に削り痕
39	不明木器	36.5×2.7	芯持材	全体的に丁寧な削り、上部は焼けた痕跡か。
40	不明木器	24.5×5.6×0.4		穿孔2ヶ所、もう片方の端を薄く削り、穿孔9ヶ所
41	不明木器	24.4×5.2×0.3		穿孔2ヶ所、もう片方の端を薄く削り、穿孔4ヶ所?

第1表 SE039出土木器一覧



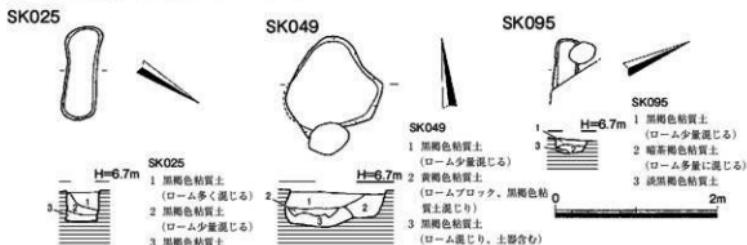
第 11 図 SE039 出土遺物実測図 (4) (1/4)

#### 4) 土坑 (SK)

SK025 (第12図) B-3区で検出した。長辺1.15m、短辺0.37mの隅丸長方形プランで、深さ0.39mを測る。出土遺物は破片ばかりで固化できなかった。時期は不明である。区域・形状から土坑墓の可能性もある。

SK049 (第12図) B-2区で検出した。西側は一部オーバーハングしている不整形な土坑である。深さ0.46mを測る。貯蔵穴の可能性もある。出土遺物が少なく破片ばかりで固化していない。時期は不明である。

SK095 (第12図) BC-2区で検出した。一部をSC040に切られる。幅0.37m、深さ0.17mの土坑である。遺物は全く出土していない。



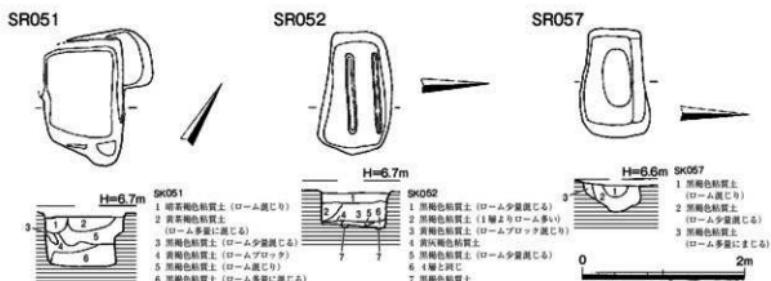
第12図 SK025・049・095 実測図 (1/60)

#### 5) 土坑墓 (SR)

SR051 (第13図) B-2区で検出した。ST043が一部を切っているように見えるが、潰れて上面に覆いかぶさっただけで、SR051の方が新しい。長さ約1.3m、幅0.98m、深さ0.66mを測る。土器は弥生土器片が出土したが、詳しい時期は不明である。

SR052 (第13図) B-2区で検出した。長さ1.47m、幅0.83m、深さ0.46mを測る。中心からずれた位置に長軸方向に2本溝がみられる。木棺の可能性がある。短軸方向には溝が確認できない。主軸は東西方向である。弥生土器片が数点出土したが、詳しい時期は不明である。

SR057 (第13図) B-2区で検出した。長さ1.33m、幅0.76m、深さ0.24～0.32mを測る。土器は出土していない。またSR051とは主軸の方向を同じ東西方向にする。



第13図 SR051・052・057 実測図 (1/60)

## 6) 壺棺墓 (ST)

削平により依存状況は良好ではないが、弥生時代中期後半から後期前半の壺棺が12基出土した。後世の破壊により合口か单棺の判別ができない壺棺もみられる。

ST028 (第14図) B-2・3区で検出した。成人用壺棺である。墓壙堅坑および壺棺が削平されており、削平により上壺の存在は不明である。一部搅乱されているが、墓壙は不整形な隅丸方形を呈し長さ0.98m、幅0.78mが残る。主軸方位はN-140°-E、埋置角度は約27°を測る。KIII b期の壺棺である。

出土遺物 (第14図42) 42は壺で口縁部を欠く。底径12.8cm、残存器高約75.0cmを測る。口縁部は削平により欠損する。胴部に2条の突帯を巡らす。調整は内外面共にナデ調整、色調は淡黄褐色である。外面に大きな黒斑が確認できる。

ST032 (第14図) B-2区で検出した。棺の組み合わせは、上棺が鉢、下棺が壺の組み合わせとなる成人用の合口式壺棺である。粘土等目張りは確認できなかった。墓壙堅抗上部が削平されているが階段状になっており、斜坑は全て残る。上壺・下壺ともに斜坑内に収まる。墓壙は南側の一部が飛び出るが隅丸長方形を呈し、長さ1.53m、幅0.91mが残る。主軸方位はN-36°-W、埋置角度は33°を測る。KIII b期の壺棺であろう。

出土遺物 (第14図43、44) 43は上壺に使用された鉢である。口径59.8cm、底径10.2cm、高さ32.4cmを測り、口縁部は「T」字状の口縁を有する。胴部は内弯する。調整は内外面共にナデ調整、色調は橙褐色である。底部付近に黒斑が確認できる。44は大型の壺で口径58.2cm、底径11.8cm、高さ92.4cmを測る。口縁部は「T」字状の口縁を有し、頭部に1条の三角突帯、胴部中央や下寄りに2条の突帯をめぐらす。壺の下半部にやや膨らみを感じる。調整は剥離して不明である。色調は淡橙褐色で、胴部に黒斑が確認できる。上壺・下壺共に一部削平を受けている。

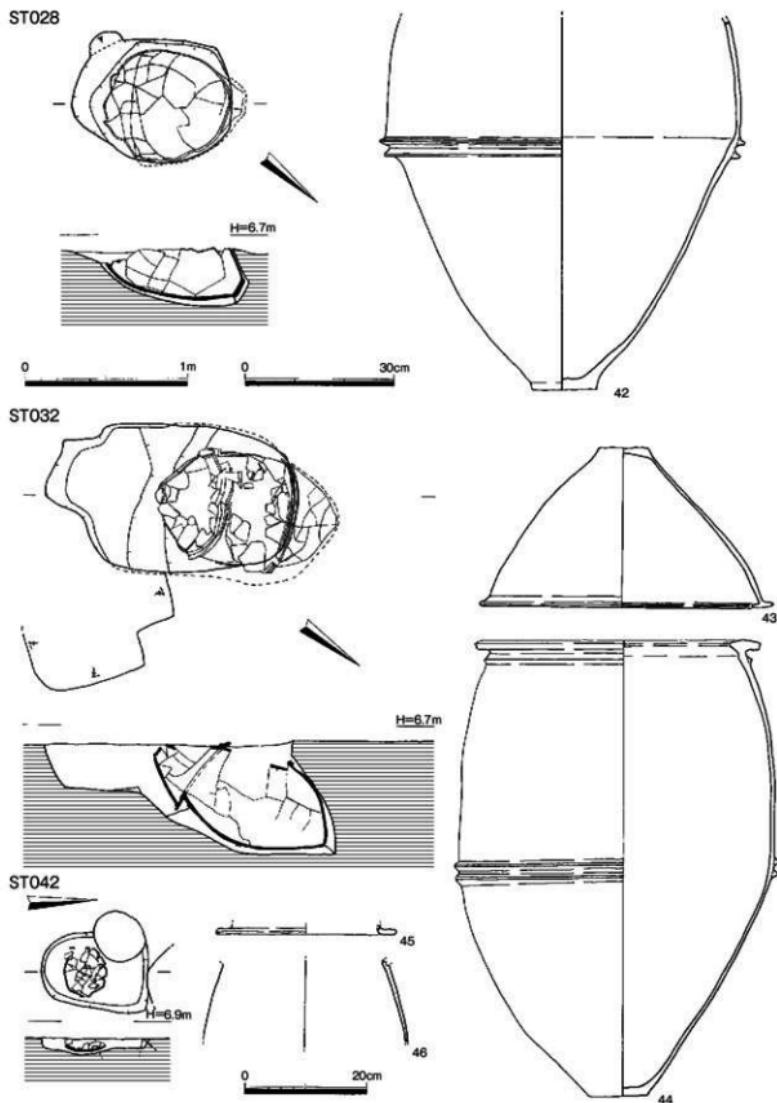
ST042 (第14図) B-2区で検出した。上棺、下棺ともに壺の小児棺である。墓壙上部が削平されており、上壺の口縁部と下壺の頭部から胴部だけが残る。墓壙は長さ0.677m、幅0.46m、深さ0.1mが残る。主軸方位、埋置角度は不明である。

出土遺物 (第14図45、46) 45は上壺の口縁部である。口縁部のみが残り、口径約29.6cmであった。色調は橙褐色である。46は下壺の胴部上半である。残存器高13.4cm、色調は表が淡橙褐色、裏が暗灰褐色である。45、46は同一個体の可能性も考えられたが、接合せず、厚さ、色調も違うので上下の壺であると判断した。

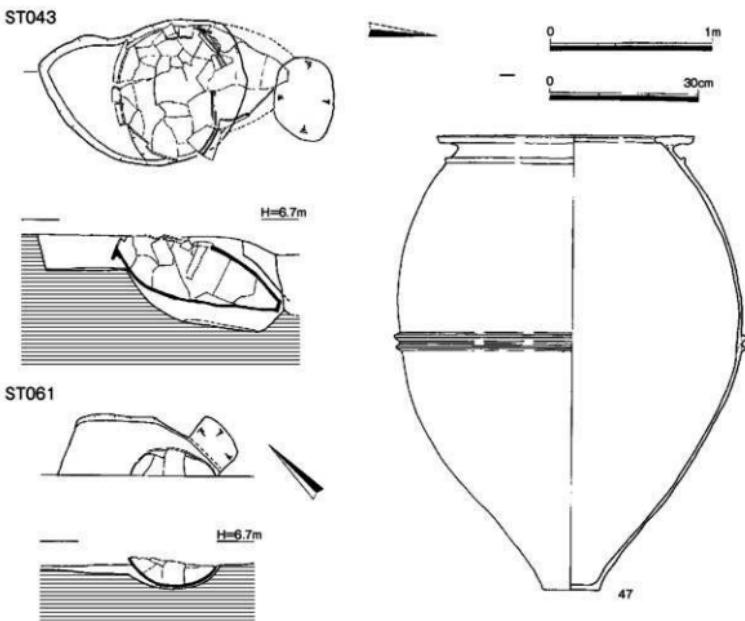
ST043 (第15図) B-2区で検出した、单棺の壺棺である。墓壙上面が削平されており、壺が潰れているが墓壙の断面は階段状になる。壺棺を収めた斜坑はほぼ全てが残り、口縁部が斜坑より飛び出し斜坑の縁にひっかけているように観察された。墓壙は不整形で長さ1.25m、最大幅0.88mを測る。主軸方位はN-5°-W、埋置角度は15°を測る。KIII c期の壺棺であろう。

出土遺物 (第15図47) 口縁部の大部分が欠け、土圧で押し潰された形で出土した。口径約52.2cm、底径11.4cm、高さ91.8cmの大型の壺である。倒卵型の胴部に、「T」字状の口縁部が付く。頭部に断面三角の突帯が1条、胴部中央に2条の三角突帯を巡らす。調整はナデ調整で、突帯部は横ナデを施す。胎土に1~3mmの砂粒を含み、色調は橙褐色、胴部に黒斑が確認できる。

ST061 (第15図) B-2区で検出した。調査区の端での検出となり、アスファルト・敷地境界の柵と重なり全体を取り出せなかった。墓壙の北西側は搅乱を受けるが、全体的に深さが浅く、残りが悪い。壺棺は胴部中位ほどに突帯を2条巡らす。柵に刺さっており壺棺はほとんど取り出せなかつた。成人棺であろう。



第14図 ST028・032・042実測図(1/30)および出土遺物実測図(45・46は1/8、他は1/10)

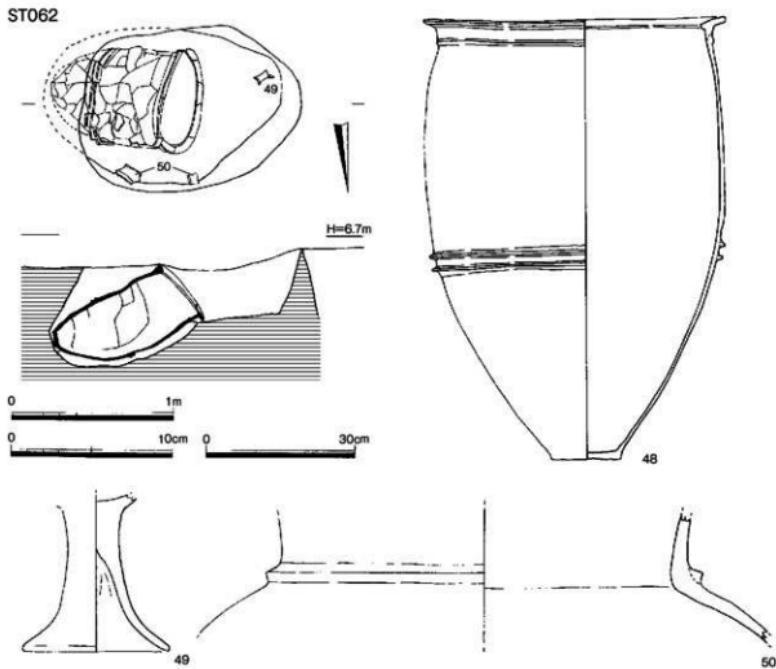


第15図 ST043・061実測図(1/30)および出土遺物実測図(1/10)

ST062(第16図)AB-2区で検出した、単棺の壺棺である。墓壙は削平されているが、壺棺はほぼ完形に復元できた。壺の上に木蓋が乗っていたと考えられる。墓壙は不整形な方形で、長さ1.34m、幅0.98mを測り、墓壙は階段状に掘削されている。ST062もST043と同じく壺棺の口縁部が斜坑より飛び出し斜坑の縁にひっかけているように観察された。主軸方位はN-85°-W、埋置角度は約18°である。全体的に土圧で歪んで検出された。KⅢc期の壺棺である。また、墓壙内から高坏、壺が検出されている。

出土遺物(第16図48~50) 単棺がほぼ完形に復元できる形で出土した。48は口径62.0cm、底径13.8cm、高さ89.0cmの大型の壺である。胴部最大径は60.8cmで、位置は胴部の上よりも下である。頸部に断面三角の突帯を1条、胴部中央下寄りに2条の突帯を巡らせる。器面調整はナデ調整で、突帯部分は横ナデを施す。胎土に1~3mmの砂粒を含み、色調は橙褐色である。49、50は弥生土器である。49は高坏の脚部で底径約9.0cm、50は壺の頭部である。

ST063(第17図)A-1区で検出した。ST063もST061と同じく調査区外に伸びアスファルト・橋によって調査が阻まれた。墓壙の全体像は分からぬが深さ1.42mと深く違う遺構(壺棺墓か?)の可能性もある。時間が無く一度に掘削してしまったが、断面図を見ると1~3層、4層で違う遺構になっていると考えられる。なお、4層からは遺物は出土していない。主軸方向、埋置角度は不明である。壺棺はできる限り取り出した。上壺の時期はKⅢa期である。下壺はできるかぎり取り出したがバラバラで底部のみが復元できた。



第16図 ST062実測図(1/30)および出土遺物実測図(48は1/10、他は1/3)

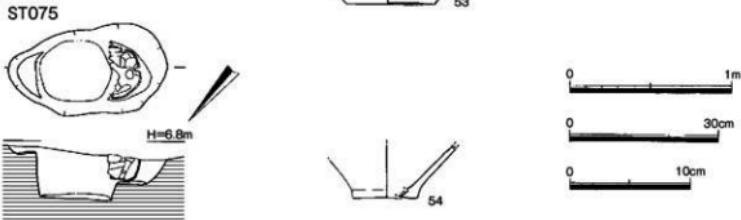
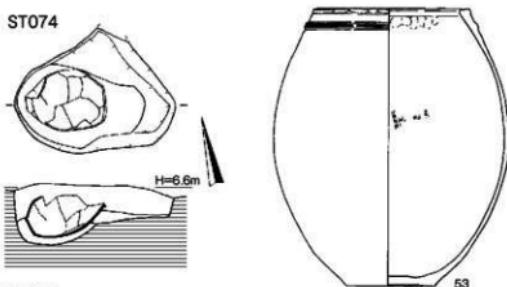
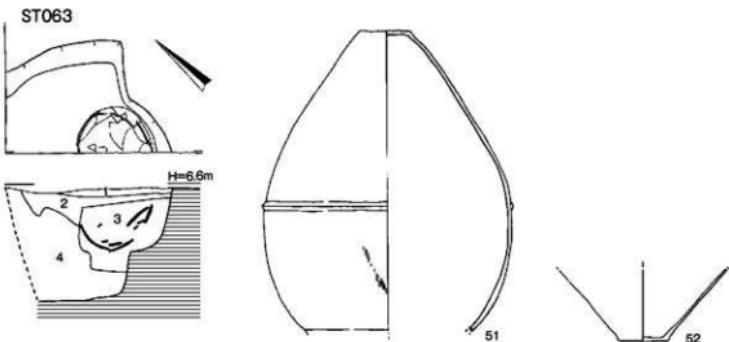
出土遺物（第17図51、52）51は小児棺の上蓋である。口縁部を除いて復元できた。底径10.6cm、高さ約60.8cmが残る。胴部中位に1条の三角突帯が巡る。一部にハケ目が確認できる。胎土に1～3mmの砂粒を含み、色調は暗黄褐色から橙褐色で一部に黒斑が確認できる。52は下蓋で破片が多く、実測できたのは底部の一部のみであった。

ST074（第17図）B-2区で検出した、丹塗りの小児棺である。墓壙は不整形で長さ0.98m、幅は最大で0.76mを測る。また、墓壙は一段掘に掘削されている。主軸方位はN-77°-W、埋置角度は29°である。時期はKIVa期であろうか。

出土遺物（第17図53）口縁から頭部の一部を除きほぼ完形に復元できた。口径約26.6cm、底径14.3cm、高さ45.2cmを測る。器形としては寸動である。口縁部は打欠き、その下に断面M字状の突帯が巡る。外面、内面上部まで丹で塗られており、内面口縁部は指押さえ、一部にハケ目が確認できる。焼成は良好で、胎土には径4mm以下の砂粒を含む。色調は橙褐色である。

ST075（第17図）B-2区で検出した。墓壙は大きく削平を受けており、長さ0.98m、幅0.52mの不整形を呈する。深さは中心部が最も深くなっている。別の遺構があった可能性も考えられるが、遺構検出の際にはわからなかった。主軸方位はN-50°-E、埋置角度70°である。

出土遺物（第17図54）底部のみ出土した。胴部から口縁部は無く、別の遺構の可能性を伺わせる。



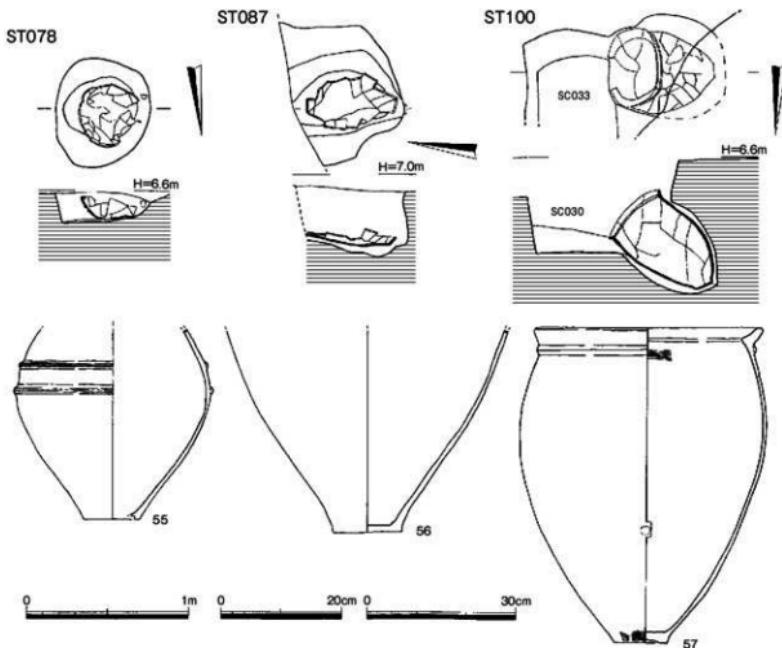
第17図 ST063・074・075 実測図(1/30)および出土遺物実測図(53・54は1/8、51・52は1/10)

54は小児棺の底部である。底径10.4cmが残る。調整は摩滅しており不明である。胎土には径3mm以下の砂粒を含む。色調は橙褐色である。

ST078(第18図)B-2区で検出した。墓壙は大きく削平を受けており、0.59~0.87mの円形である。主軸方位はN-88°-E、埋置角度は17°である。

出土遺物(第18図)55は小児棺である。壺の頭部から口縁部を欠く。底径は約9.0cmである。胴部上位から中位にかけ断面M字の突帯を2条めぐらす。調整は摩滅しており不明である。焼成は良好で、色調は淡橙褐色である。また、胎土に径1~4mmの砂粒を含む。

ST087(第18図)B-1・2区で検出した。掘削当初は近代の土が墓壙の中に入っており、搅乱



第18図 ST078・087・100実測図(1/30)および出土遺物実測図(100は1/10、他は1/8)

と考え掘進めていたが、底近くで黒褐色粘質土に変わりその中から甕棺が出土した。搅乱により破壊されていたため墓壙はもう少し小さかったと考えられる。主軸方位はN-10°-W、埋置角度は35°である。

出土遺物（第18図56）56は小児棺である。成人棺とするには小さい。ST087の全体図ではもう少し接合できただが、搅乱を受けていたため胴部中央より上がボロボロであった。底径11.0cmを測る。焼成は良好で、色調は橙褐色である。胎土には径5mm程の砂粒を含む。

ST100（第18図）SC033、040に墓壙の一部を切られて出土した。SC033の掘削途中でみつかり、掘りすぎたきらいがある。墓壙はおそらく楕円形の形をしていたと考えられる。ST100も甕棺の口縁部が斜坑より飛び出しているように観察された。

出土遺物（第18図57）57は小児棺でほぼ完形に接合された。上蓋があったかどうかはSC033に切られている関係で不明である。口径45.4cm、底径10.8cm、高さ65.6cmであった。内面頭部と外底面にハケ目調整が確認できる。また胴部中央下に円形の穴が確認できた。この穴は甕棺を斜坑に入れられたときに下向きになるように設けられていた。焼成は良好、色調は橙褐色、胎土には径2mmの砂粒が確認された。K IV a期の甕棺である。

## 5. 小結

今回の調査では掘立柱建物（SB）2棟、竪穴住居（SC）4棟、井戸（SE）1基、土坑（SK）3基、土坑墓（SR）3基、壺棺墓（ST）12基を検出した。

SB009は須恵器の小片が出土している。SB068は大型の掘立柱建物で現状では2間×3間である。弥生時代後期初頭に位置づけられる。

竪穴住居（SC）は4棟検出された。古墳時代前期初頭の短期間のうちに建て替えられたようである。順番としてはSC056→SC040・SC067→SC033である。

SE039は12世紀後半の井戸である。白磁・同安窯系青磁・土師器のほか、木製品が多数出土した。12世紀後半の時期に取まる遺構はこの井戸だけであったが、周間に同時代の遺構がある可能性は否定できない。

SR051は土器が小片だったために詳しい時期は分からぬが、ST043との切合いから少なくとも弥生時代中期後半よりも新しい。SR052・057と共に弥生時代の後半と考えている。

壺棺墓（ST）は12基検出された。2基は隣地との境界に位置しており、図面など不完全である。12基のうち、成人棺は5基検出された。5基中、上壺があったかわからない壺棺が2基あるが、確實に上壺があったのが1基だけであった。残りがいい成人棺3基（ST032・043・062）は弥生時代中期後半（K III b・K III c）に位置している。成人棺で残りがいい3基を見比べるとST032は上壺まで斜坑の中に納まるのに対し、上壺の無いST043・062を見ると斜坑は頭部付近まで、口縁部を縁にかけるように出土した。時期で見るとST032はK III b、ST043・062はK III cに位置しており、ST043・062の方が弥生時代中期後半でも新しい。またST032と違いST043・062は単棺である。時期的な違いによるものか、合葬と単棺による違いか個体数が少なく、まだはつきりしていない。

墓域と生活域にも小さい面積であったが違いがみられた。墓域は西側、生活域は東側を占地していた。時期も墓域（壺棺墓）が弥生時代中期後半から後期前半の早い段階まで。生活域が弥生時代後期初頭に掘立柱建物が建てられて以降、竪穴住居の段階まで存在していた。ST100をSC033が切っており、SB069が一部ST100よりも東側に建つが概ね墓域と生活域は分かれていたように考えている。

遺構番号(上壺、下壺)	成人棺 / 小児棺	規模(底径・口径・高さ)	胎土	主軸方位	埋置角度	時期	墓域
ST028	成人棺	12.8cm・...・...	淡黄褐色	N-140°-E	27°	K III b	-
ST032(上壺)	成人棺(鉢)	10.2cm・59.8cm・32.4cm	淡橙褐色	N-36°-W	33°	K III b	I類
ST032(下壺)	成人棺	11.8cm・58.2cm・92.4cm	淡橙褐色				
ST042(上壺)	小児棺	...・29.6cm・...	橙褐色	-	-	-	-
ST042(下壺)	小児棺	...・...・...	淡橙褐色				
ST043	成人棺	11.4cm・52.2cm・91.8cm	淡橙褐色	N-5°-W	15°	K III c	I類
ST061	成人棺	...・...・...	淡黄褐色	-	-	-	-
ST062	成人棺	13.8cm・62.0cm・89.0cm	淡橙褐色	N-85°-W	18°	K III c	I類
ST063(上壺)	成人棺	10.6cm・...・...	橙褐色	-	-	-	-
ST063(下壺)	成人棺	10.2cm・...・...	橙褐色	-	-	K III a	-
ST074	小児棺	14.3cm・26.6cm・45.2cm	橙褐色	N-82°-E	29°	K IV a?	I類
ST075	小児棺	10.4cm・...・...	橙褐色	N-50°-E	70°	-	-
ST078	小児棺	9.0cm・...・...	淡橙褐色	N-88°-E	17°	-	-
ST087	小児棺	11cm・...・...	橙褐色	N-11°-W	35°	-	-
ST100	小児棺	10.8cm・45.4cm・65.6cm	橙褐色	N-85°-E	96°	K IV a	II類

第2表 那珂遺跡群第177次調査出土壺棺一覧

# 那珂遺跡群第 180 次調查



## IV. はじめに

### 1. 調査に至る経緯

福岡市教育委員会は、同市博多区東光寺町1丁目14、17番における共同住宅建設事業に伴う埋蔵文化財の有無についての照会を令和元（2019）年10月8日付で受理した。

これを受け埋蔵文化財課事前審査係は、申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である那珂遺跡群に含まれていること、確認調査が実施され現地表面下約50cmで遺構が確認されていることから、遺構の保全等に関して申請者と協議を行った。

その結果、埋蔵文化財への影響が回避できないことから、共同住宅建設事業で遺跡が破壊される部分について記録保存のための発掘調査を実施することを合意した。

その後、令和2年3月19日付で個人を委託者、福岡市長を受託者として埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結し、同年4月8日から発掘調査を、令和3年度に資料整理、報告書作成をおこなうこととなった。

### 2. 調査の組織

調査委託：個人

調査主体：福岡市教育委員会

（発掘調査：令和2年度・資料整理・報告書作成：令和3年度）

調査総括：経済観光文化局文化財活用部埋蔵文化財課 課長 菅波正人

同課調査第2係長 蔡富士寛

庶務： 文化財活用課管理調整係 松原加奈枝（2年度）

井手瑞江

内藤 愛

事前審査： 埋蔵文化財課事前審査係長 本田浩二郎（2年度）

田上勇一郎

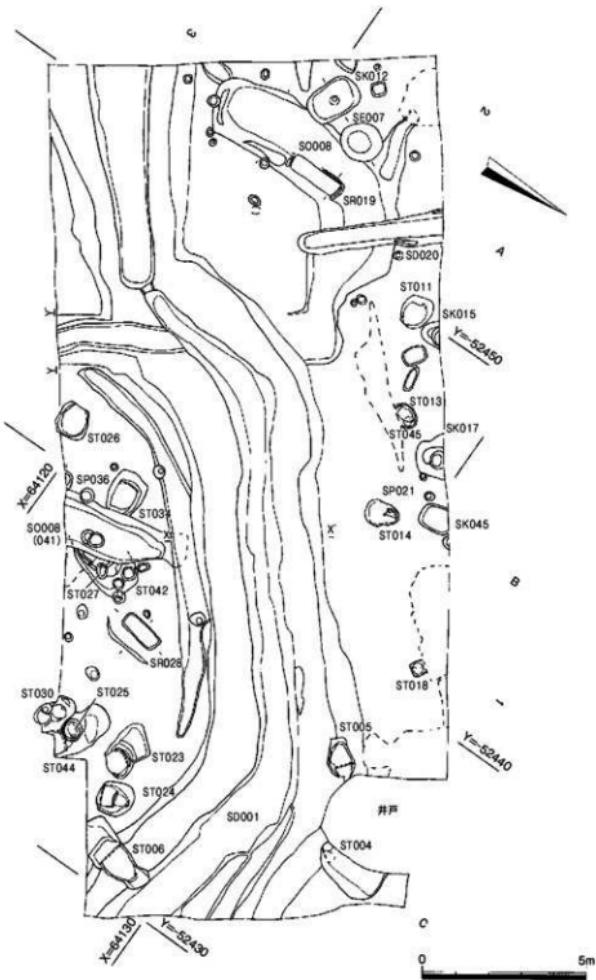
同課事前審査係主任文化財主事 田上勇一郎（2年度）

森本幹彦

同課事前審査係文化財主事 山本晃平

調査担当： 埋蔵文化財課文化財主事 清金良太

その他、発掘調査に至るまでの条件整備、調査中の調整等について事業主様をはじめとする皆様には多大なご理解とご協力をいただき、調査が円滑に進行し無事に終了することができました。ここに深く感謝致します。



## V. 調査の記録

### 1. 調査の概要

今回報告する那珂遺跡群第180次調査区は、博多区東光寺町1丁目14、17番に所在し、調査前の現況は標高約6.8mを測る家屋解体後の平地であった。調査地点は遺跡の北東部に位置し、隣接する南側では第177次調査、北側では107次調査が行われ、筑紫通を挟んだ東側では第102次調査が行われている。その周辺では第123、132次調査が実施され、更にその周囲でも数多くの調査が進んでいる。なお、第177次調査では甕棺墓、竪穴式住居、井戸などが検出されている。

「I. 遺跡の立地と環境」でも触れたように本調査区は、那珂遺跡群の立地する丘陵は、かつての沖積作用によって細かい開析谷が複雑に入り込む丘陵である。また北側では、浅い谷を挟んで比恵遺跡群が占地する。

調査に入る前の段階で調査区以外の盛土が除去されており、調査の最後に平板測量する必要ができた。

調査区は現代の盛土の下、東側では約GL-50cmで遺構面である鳥栖ローム層が確認された。遺構面は西側が高く、東側は低くなっている、標高は5.94~6.51mを測る。

遺構検出は鳥栖ローム面までを重機で剥ぎ取って実施し、以下は人力による掘削を行った。今回の発掘調査では溝2条、井戸1基、土坑3基、落とし穴1基、墳丘墓1基、土坑墓・木棺墓2基、甕棺墓17基等が確認された。出土遺物量は、コンテナケースにして43箱である。

発掘調査は令和2年4月8日に着手した。まず、発掘機材の搬入やリース機材を搬入した。翌日に重機による表土剥ぎ取りを始め、その後、壁面清掃、遺構面保護、遺構検出を実施し、10日から本格的に遺構検出・遺構掘削、世界測地系によるトラバース杭の設定をおこなった。順次、西側から遺構の掘り下げや写真撮影、1/20縮尺を主体とする図化をおこなった。5月28日に高所作業車を利用して全景撮影を行った。その後、残る図化や甕棺の取り上げ・実測・個別写真撮影等を終え、調査区を埋め戻すとともに、調査区以外の盛土が除去された箇所については平板測量を行った。令和2年6月26日に第180次調査を終了した。

なお、調査対象面積は、「IV.-1. 調査に至る経緯」とおり、295m<sup>2</sup>であった。調査時の遺構番号は、001から3桁の通し番号を遺構の種別に関わらず付した。それらの番号には、欠番があるものの、重複はない。以下の報告にあたっても、原則的に調査時の遺構番号を用い、例言に記した遺構略号と組み合わせて記述した。

### 2. 遺構と遺物

以下、遺構種別ごとに報告を行うが、調査区での遺構位置を本文中で示す際には、調査時における世界測地系による10m単位の平面座標を基準とした英字（西から東にA~C）と数字（北から南に1~3）の組み合わせによるグリッド表記を用いる（第19図参照）。

#### 1) 溝 (SD)

SD001（第19図）調査区の中央を東西に走る溝である。一部南側へ分岐する。東側が西側に比べて約20cm深い。1・2層は弥生時代の甕棺が多量に含まれていたが、3層から江戸時代の土器が出土した。南北方向はSD001の北側まで続いているように見えるが、北側の深さは約10cmである。深さは北側と南側では差があり出土する土器も違うことから別遺構であり、また南側では江戸時代の土器が検出されたことからSD001と同じ溝であると判断した。

出土遺物（第 20 図）58・59 は磁器の碗である。58 は全体に灰釉がかけられており、上部には目跡が残る。高台下にも砂の跡が残り、重ね焼きの痕跡が伺える。59 は胎土が淡橙色を呈しており、灰釉が全面にかけられる。底部の多くは欠損する。60・61 はカワラケである。60 は底部糸切、61 はヘラ切りである。62 は瓦質土器の釜の把手である。内外面共に煤が付着し、径 9 mm の穿孔がある。63 は瓦質土器の火舍である。口径は約 27.6 cm を測る。外面にはスタンプがみられる。

SD020（第 21 図）調査区の A - 2 で検出した。深さ約 0.4 m、幅 1.0 m の溝である。なお調査区の中ほどが約 0.1 m 深い。調査区境界付近から 66、67 の甕を検出した。

出土遺物（第 21 図）64 は須恵器の坏蓋である。口径約 13 cm、高さ 3.3 cm を測る。回転ナゲがみられる。65 は土師器で甕の把手である。66・67 は須恵器の甕である。66 は口径 23 cm、復元胴部最大径は 44.5 cm、高さ 45.6 cm を測る。胴部は約 1/2 が欠損する。外面は平行叩き、内面の上部は円弧状の当て具痕、下部は同心円當て具痕が確認できる。67 は口縁、底部を欠く。

### 2) 井戸 (SE)

SE007（第 22 図）調査区の A - 2 区で検出した。径 1.14 m、深さ 1.94 m の井戸である。遺物はほとんど出土しなかった。

出土遺物（第 22 図）68 は須恵器の坏身か皿である。底径約 10 cm に復元できる。

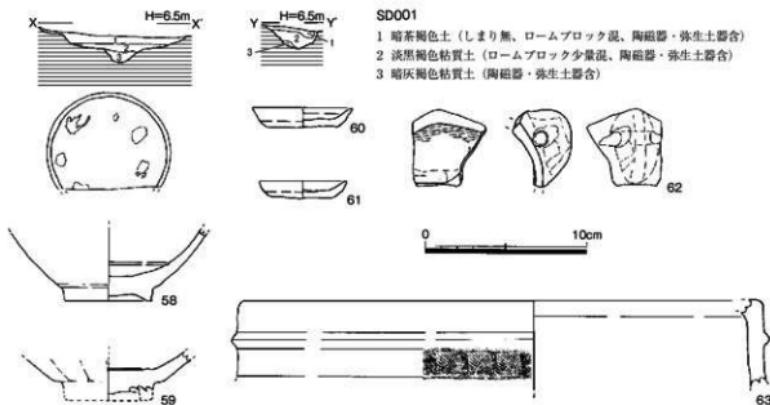
### 3) 土坑 (SK)

SK012（第 22 図）調査区の A - 2 区で検出した。隅丸長方形で長さ 1.64 m、幅 1.06 m、深さ 0.7 m である。中心部分は深くなっている。深さ 1.16 m を測る。木製の柱もしくは杭が建っていたと考えられ、出土遺物は無い。落とし穴の可能性が高い。

SK015（第 22 図）調査区の A・B - 2 区で検出した。覆土は暗茶褐色粘質土で深さ 0.2 m である。弥生土器片が出土した。

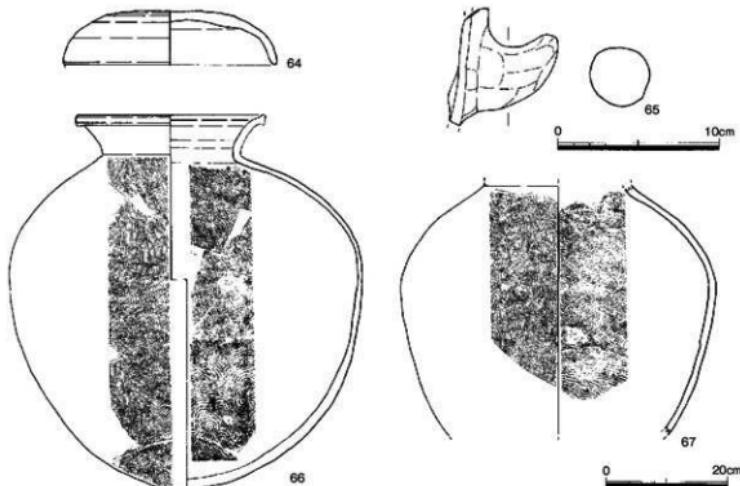
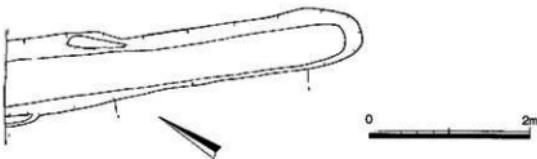
SK017（第 22 図）調査区の B - 2 区で検出した。覆土は暗茶褐色粘質土で深さ 0.56 m を測る。弥生土器片が出土した。周囲の状況から北側には壇場がある可能性がある。

SK046（第 22 図）調査区の B - 1 区で検出し、覆土は暗茶褐色粘質土で幅 0.8 m、深さ 0.3 m を測る。



第 20 図 SD001 実測図 (1/60) および出土遺物 (1/3)

## SD020

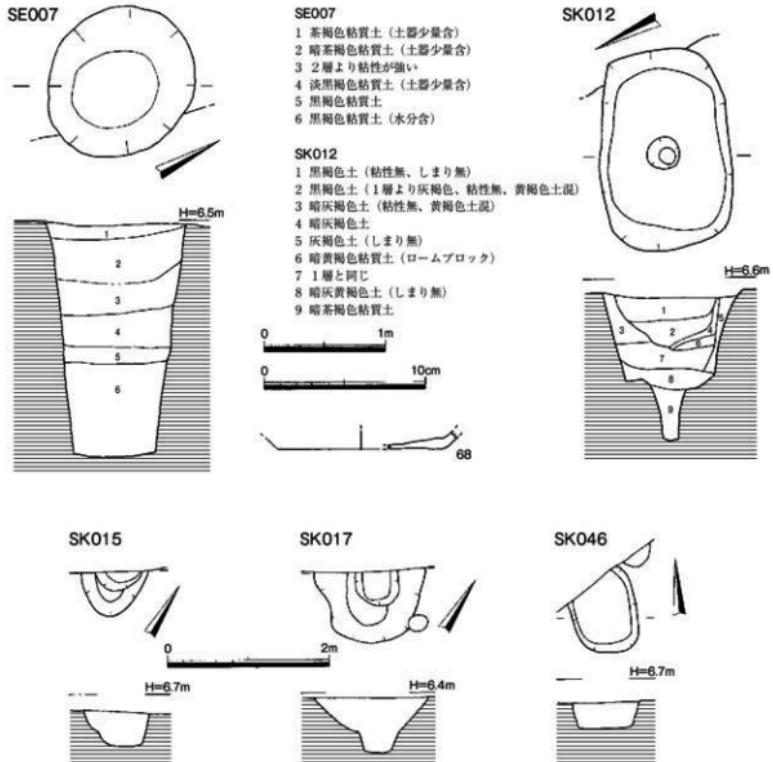


第21図 SD020 実測図(1/60)および出土遺物(63は1/4、他は1/3)

## 4) 方形周溝墓 (SO)

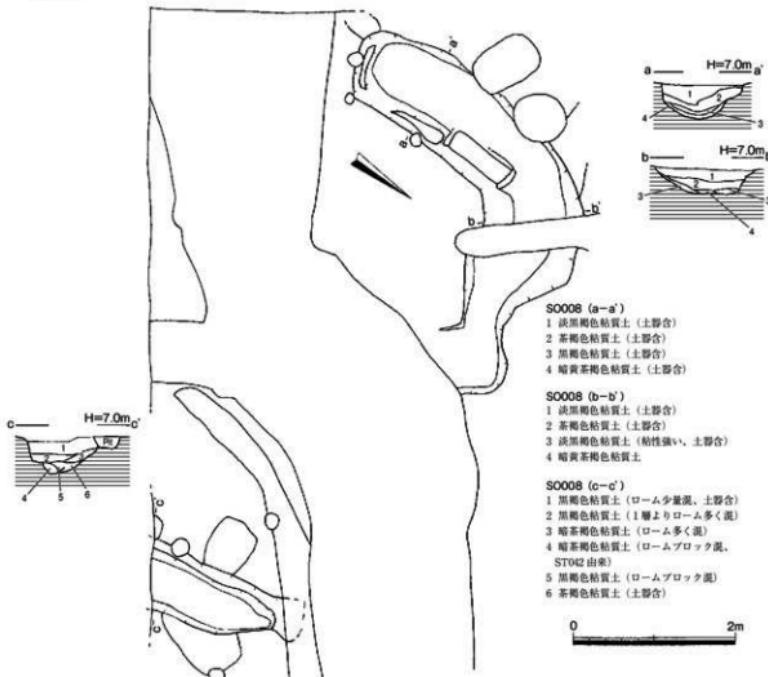
SO008(第23図)調査区A・B-2・3区で検出した。当初別々の構造であろうと掘削していくが、第23図に示した通り、方形周溝墓であることが明らかとなった。一部を江戸時代以降の溝であるSD001に切られ、ST034・042・SR019といった壺棺墓、木棺墓を切る。南北約15.6m、東西約15.4m、台状部で南北約12.1m、東西約11.7m、周溝の深さ約0.3~0.45mを測る。主体部は不明である。未調査区にあるかもしれないが、時間的制約で調査は断念した。黒褐色粘質土の1層は壺棺片ばかりが出土したが、2層は壺棺片と共に弥生土器・古墳時代前期初頭の土器が出土した。古墳時代前期初頭の土器は下の層(3層・4層)ほど多い印象を受けるが個体数は少ない。また、方位はほぼ正方位であり、比恵・那珂遺跡を走る道路状遺構とは方位がずれる。II B~II C期か。

出土遺物(第24図)紙幅の関係もあり、下層から出土した土器を中心とりあげた。69~73は弥生土器である。69・70は壺の口縁部である。69は口径約25cmを測る。70は丹塗りの壺で口縁下部にM字突起が巡る。71は壺の口縁部である。72は高坏で丹塗りをほどこす。73~74は壺の底部である。73は底径6.4cmを測る。74は底径8.6cmで外側はハケ目、内側はナデ調整が確認できる。75~77は



第22図 SE007 実測図(1/40)および出土遺物(1/3) SK012・015・017・046 実測図(1/40、1/60)

土師器である。75は古墳時代前期初頭の壺である。口径約22cm、胴部最大径24cm、底部の穿孔径は約2.5cmである。頸部に1条突帯を巡らす。焼き具合によるものか、全体的に橙褐色であるが、胴部は一部淡橙褐色から暗黄褐色である。調整は外面が摩滅して不明であるが、内面はハケ目が確認できる。76は四連壺であろうか。77の脚が付く可能性もある。精製された小型の壺を4個体組み合わせたものと考えられる。『那珂24』『博多106』に類例がある。『那珂24』の三連壺と似たような模様であると考えられるが、76には壺と壺をつなぐ連接部分があり、周りを精製粘土で充填接合したような痕跡は認められない。78はSO041の上層から出土した壺である。壺の大部分が残り、口径45.9cm、高さ51.1cmが残る。頸部に1条突帯を巡らす。口縁部から突帯までは横ナデ、突帯から下はハケ目調整である。焼成は良好で胴部に黒斑が認められる。胎土は橙褐色から淡橙褐色である。79は鉄斧である。SO008の下層から出土した。全面が鉄鏽に覆われていたため、器形は不明である。幅3.4×29cm、厚さ12cmが残る。表面の穴は剥離したものであろうか。板状の鉄を曲げており、中は空洞である。



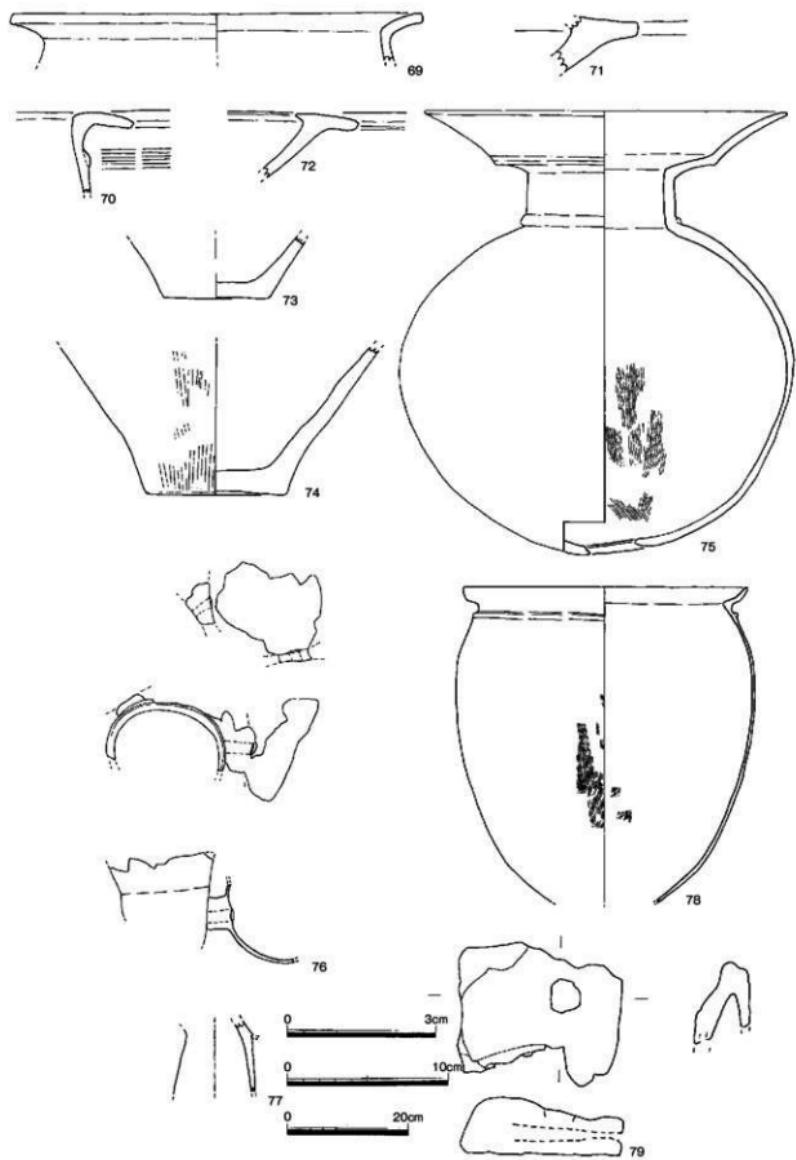
第23図 SO008実測図(1/60)

## 5) 土坑墓・木棺墓 (SR)

SR019 (第25図) 調査区のA-2区で検出した。長さ1.82m、幅0.58mに復元できる。上部のはほとんどすべてをSO008に切られ、底面と木棺があったであろう溝のみ検出した。溝も北側で確認できたが、南側の横板があったと想定される溝は検出されていない。土器が検出されず時期は不明であるが、玉類が6点見つかった。

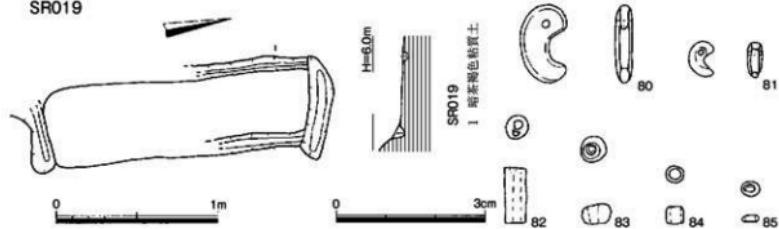
出土遺物 (第25図) 80・81は勾玉である。80は緑泥岩製で、色調は灰色がかかった深緑である。長さ16.8mm、幅9.9mm、厚さ3.5mmである。1か所1.6mmの穿孔が確認できる。81はカリガラス製で色調は暗緑色である。長さ7.3mm、幅5mm、厚さ3mmを測り、孔径1mmの穿孔が確認できる。82は壁玉製の管玉で、色調は灰色がかかった緑色である。長さ11.5mm、径5mm、孔径2.2mmである。83～85はガラス製小玉である。83はカリガラス製で、淡青色で厚さ3.1～4mm、径5.2mm、孔径1.8～24mmを測る。84はソーダ石灰ガラス製で、淡青色を呈し、厚さ3.3mm、径3.7mm、孔径2.6mmを測る。85はカリガラス製で、淡青色で厚さ1.7mm、径3.1～3.3mm、孔径1.5～2mmである。

SR028 (第26図) C-2区で検出された。1.30×0.51mの方形の土坑墓で、深さ0.49～0.6m



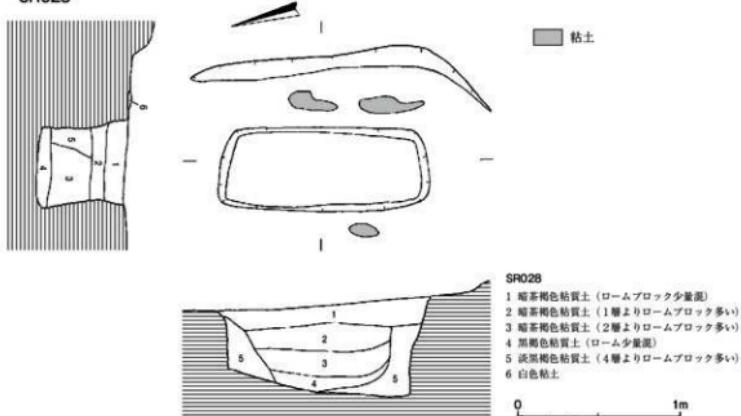
第24図 S0008出土遺物実測図 (79は1/1、75は1/4、78は1/8、他は1/3)

SR019



第25図 SR019実測図(1/30)および出土遺物実測図(1/1)

SR028



第26図 SR028実測図(1/30)および出土遺物実測図(1/3)

を測る。東側および南東側は地表面から1段下がり（最大12cm）、段落ちと墓壙の間に粘土が確認された。粘土は墓壙の西側でも見つかっている。段落ちは墓壙に沿うように検出されており、木蓋が想像されるが、木蓋が腐敗して検出されなかつたのであろう。

出土遺物（第26図）86は壺の口縁部から胴部にかけてである。口縁は逆L字状に曲がり、ハケ目が確認できる。87は壺の底部である。底部中央に穿孔が確認できる。

## 6) 壱棺墓 (ST)

北側では削平により残存状況が良好ではないものが多いが、弥生時代の中期後半から後期前半の壹棺墓が16基検出された。

ST004 (第27図) 調査区のC-1区で検出した壹棺である。墓壙・壹棺の大部分を現代の井戸を掘削する際に破壊されており、墓壙の一部と下壠の底部付近のみが残る。墓壙は北側・西側の大部分を井戸により破壊されており、不明瞭な所が多いが、深さ約0.35mが残る。主軸方位はN-8°-E、埋置角度は8°を測る。成人棺であろうか。

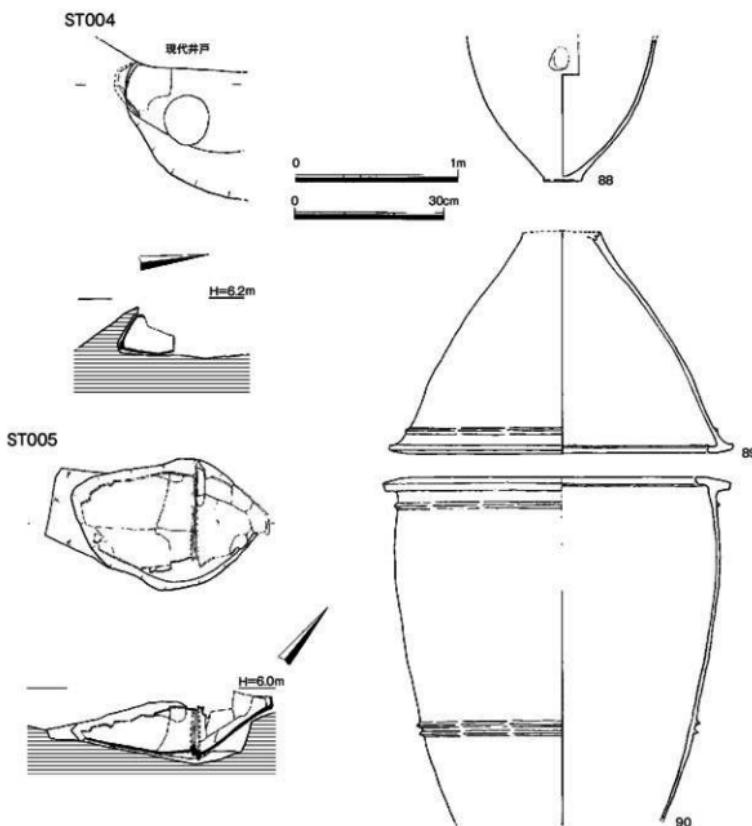
出土遺物 (第27図88) 大部分を近代の井戸により破壊されており、下壠の底部付近のみが残る。88は底径7.8cm、残存器高28.9cmが残る。胴部中央下寄りに穿孔が確認できる。調整は摩滅しており不明である。焼成は良好。色調は橙褐色で、胎土に径1~4mmの砂粒が確認できる。また黒斑が確認できる。

ST005 (第27図) 調査区のC-1区で検出した成人棺である。棺の組み合わせは上棺が鉢、下棺が壠の組み合わせとなる成人用の合口式壹棺である。墓壙・壹棺の大部分を江戸時代のSD001、近代の井戸に切られており、墓壙の規模等は不明であるが、階段状にステップが付くタイプである。上壠の上部は墓壙内のステップに置く。主軸方位はN-51°-E、埋置角度は不明である。KⅢa期の壹棺であろう。

出土遺物 (第27図89、90) 89は鉢である。口径約70.1cm、底径約16.2cm、残存器高45.3cmが残る。口縁部は「T」字状の口縁を有し、その上に1条三角突帯が巡る。調整は口縁部から三角突帯までを横ナデ、口縁部付近以外は内外面共にナデ調整がみられる。色調は淡黄褐色で黒斑が確認できる。焼成は良好で、胎土は緻密で径1~3mmの砂粒を含む。90は大型の壠で胴部下半部から底部はSD001により欠損する。口径約69.2cm、残存器高70.5cmが残る。口縁部には「T」字状の口縁を有し、口縁直下に1条、胴部中央下よりに2条の三角突帯を巡らす。口縁部から口縁直下の突帯までを横ナデ、口縁部付近以外はナデ調整が確認できる。色調は暗橙褐色で、焼成は良好である。胎土は緻密で径1~4mmの砂粒を含む。

ST006 (第28図) 調査区のC-2区で検出した。棺の組み合わせが独特で、小型の壠（小児棺）を墓壙内にはめ込み、壠の底部を打ち欠いたものを挿入している。三連棺などとは違う形態である。墓壙・壹棺の多くのをSD001に切られる。墓壙は長く、底面の南側は1段上がりテラス状になる。上壠は無く、木蓋があったと考えられ、木蓋と壠を密着させたであろう粘土も検出されている。墓壙は残りがいい所で幅1.08m、深さ0.7mである。主軸方位はN-22°-E、埋置角度は0°を測る。中壠の口縁部付近には粘土が確認できた。KⅢb期の壹棺であろう。

出土遺物 (第28図91、92) 先に触れたとおり、木蓋に下壠があるタイプと想定し掘削していたが、木蓋・中壠(91)・下壠(92)であった。91は口径75.6cm、高さ約102cmが残る。底部は打ち欠いており、この下に92が確認できた。口縁部は「T」字状の口縁を有し、断面四角の突帯が口縁直下に1条巡る。また、胴部中央下よりに断面三角の突帯が2条巡る。調整は口縁部を横ナデ、胴部はナデが確認できるが大部分は摩滅している。焼成は良好で、色調は外面が橙褐色からぶい褐色、胎土に径4mm以下の砂粒を含む。胴部上方に径12cmの黒斑があり、支点としての跡と考えられ、黒斑は底部付近にも広がっている。(『弥生人のタイムカプセル』福岡市博物館1998でタイプBとしたものである) 92は口径約30.6cm、高さ10.2cmが残り、その多くがSD001に切られる。調整は全体的に摩滅しており不明である。焼成はやや軟化、色調は橙褐色である。胎土は緻密で径2mm以下の砂粒を含む。91の底部付近の径は19.4cmしかなく、何か別の用途があり打ち欠いたのであろうか。想像になつ



第27図 ST004・005実測図(1/30)および出土遺物実測図(1/10)

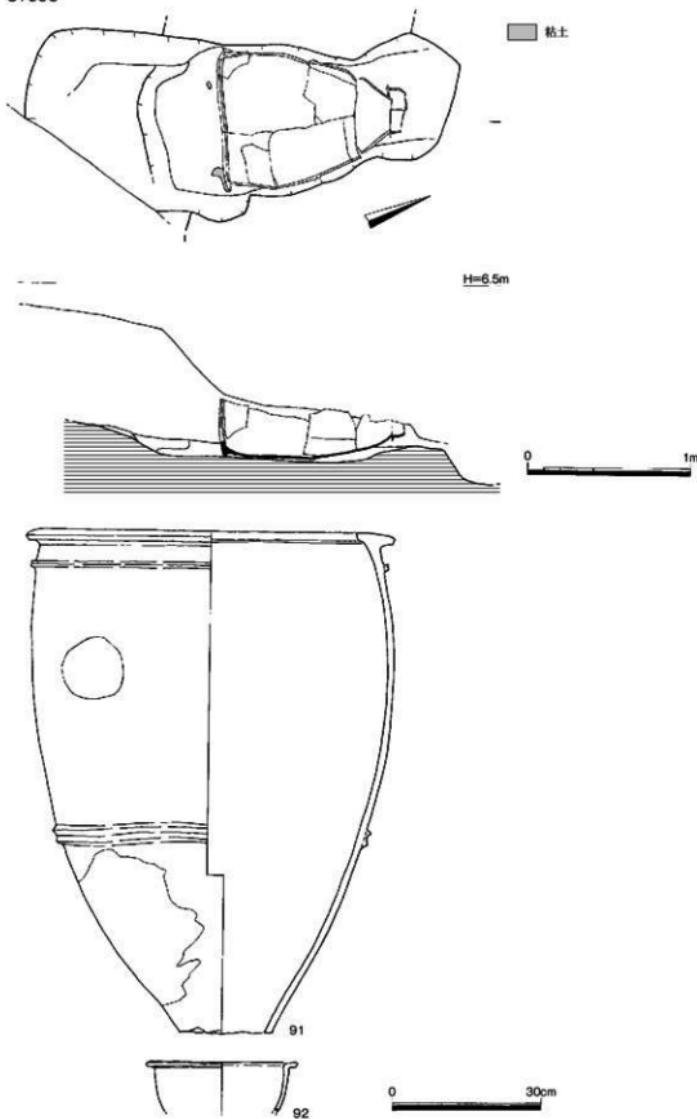
てしまうが、91の焼成後、底部に欠損がみつかり、そのため92を用いたとは考えられないだろうか。類例を持ちたい。

ST011(第29図)調査区のA-2区で検出した成人棺である。単棺であろうか、上壺があった形跡は認められなかった。墓壙の上部は削平を受け、斜抗のみが残る。斜坑の規模は1.08m×0.92m、深さ0.42mである。主軸方向はN-58°-W、埋置角度は44°である。時期はK III b期の斉棺である。

出土遺物(第29図93)93は口径約44.2cm、底径11.6cm、高さ85.3cmを測る。「T」字状口縁直下に1条断面三角の突帯が巡り、胴部中央に2条の三角突帯が巡る。頭部は窄まり、胴部中央やや上で最大径59cmとなる。口縁部とその直下では横ナデが確認できる。焼成は良好で、色調は淡橙褐色である。胎土は径1~5mmの砂粒が確認できる。中心部付近に黒斑が確認できる。

ST013(第29図)調査区のB-2区で検出した小児棺である。墓壙は0.77m×0.55mの梢円形を呈し、深さ0.06mと非常に浅い。すぐ下にST045が確認された。主軸方向はN-173°-W、埋

ST006

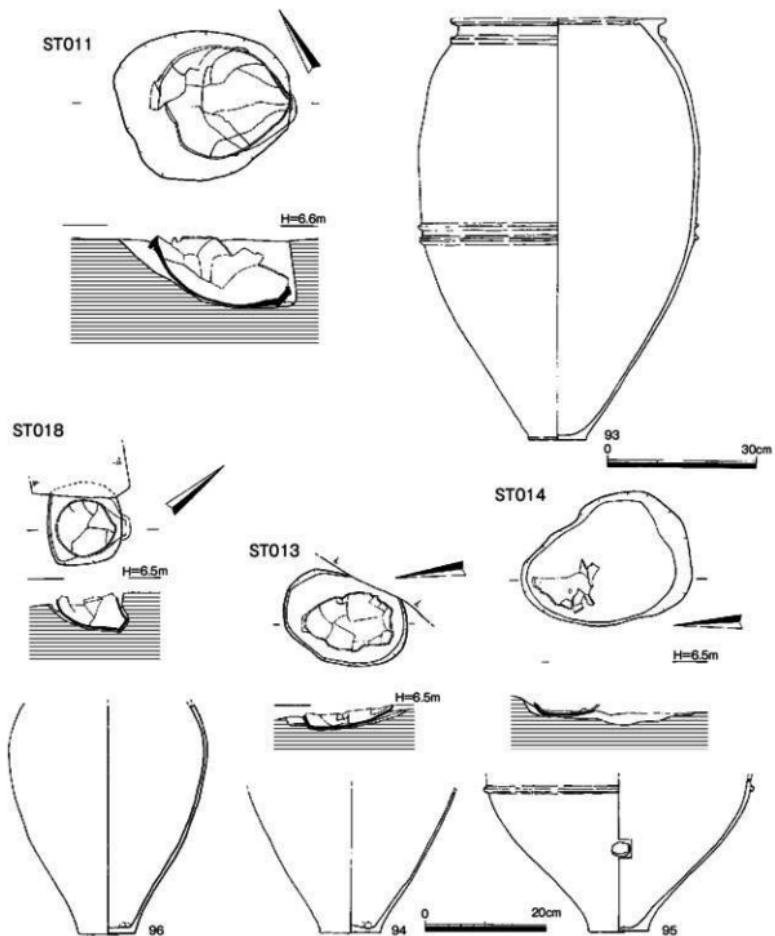


第28図 ST006 実測図(1/30)および出土遺物実測図(1/10)

置角度は 34°である。

出土遺物（第 29 図 94）底径 9.8cm、高さ約 50cm 程が残るが、非常にもろく、上部まで接合できなかった。底部付近に指押さえ痕が残るが、それ以外は摩滅しており不明である。焼成はやや軟化し、色調は橙褐色土である。

ST014（第 29 図）調査区の B - 2 区で検出した小児棺である。ほとんどが削平されており、一部のみ検出できた。墓壇は 1.05 m × 0.78 m の楕円形で、深さ約 0.1 m が残る。主軸方位は N - 177° - E、埋置角度は 39°を測る。時期は K IV a 期の甕棺である。



第 29 図 ST011・013・014・018 実測図 (1/30) および出土遺物実測図 (93 は 1/10、他は 1/8)

出土遺物（第29図95）底径約9.8cm、高さ約25cmで、小児棺の1/4程度が残る。胴部に断面方形の突帯が1条巡り、穿孔が確認できる。焼成は良好で色調は淡黄褐色を呈する。胎土は径2~5mmの砂粒がみられる。胴部中位に突帯は巡らない。

ST018（第29図）調査区のB-1区で検出した小児棺である。墓壙は方形で1辺は0.46m、斜坑の深さは0.24mである。主軸方位がN-140°-W、埋置角度は36°を測る。

出土遺物（第29図96）口縁部付近を欠損する。底径9.0cm、高さ37.5cmが残る。外面は摩滅して不明であるが、内面にナデが確認できる。また、底部付近には指押さえ痕がみられる。焼成は良好で、色調は明橙褐色から明茶褐色である。胎土に径1~5mmの砂粒を含む。

ST023（第30図）調査区のC-2区で検出した成人棺である。堀棺が、集中して確認できた地域である。下壙はほとんど検出されたが、上壙はほぼ潰れていた。呑口の堀棺であろうか。墓壙の入口は長く、現況の長さ1.58m、幅0.9~0.11m。深さ0.68mと不整形であるが西側が東側に比べて広い。墓壙内には、約0.2mのステップ状の段が1段確認できる。主軸方位はN-66°-W、埋置角度は34°である。時期はKⅢb期の堀棺である。

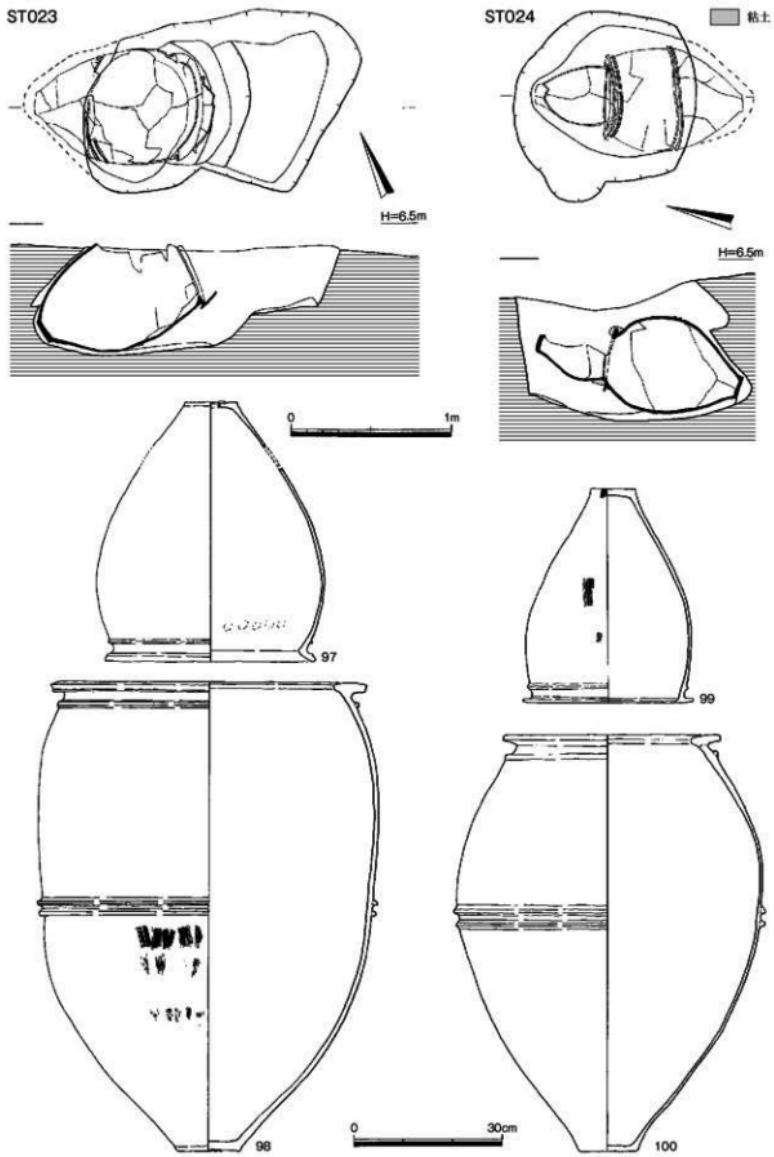
出土遺物（第30図97、98）97は上壙である。口径約43cm、高さ50cm程であろうか。底径約10.8cmに復元できる。最大径は胴部中ほどで46.8cmを測る。逆「L」字状の口縁を有し、1条の三角突帯が巡る。調整は外面の口縁部から突帯にかけて横ナデが確認でき、内面は指押さえ痕が見られる。焼成は普通で、色調は淡黄橙褐色である。胎土に径1~6mmの砂粒を含む。98は口径65cm、底径26cmである。最大径は胴部の上部にあり69.9cmを測る。「T」字状の口縁を有し、口縁直下に1条、胴部中位に2条の断面方形の突帯が確認でき、底部はやや上げ底である。外面にはハケ目がみられ、内面には指押さえ痕が確認できる。焼成は良好である。色調は基本的に橙褐色であるが、上部、胴部中位の突帯は橙褐色が強く、また胴部下部に幅11cm程の淡橙褐色の箇所が帶状に確認できる。粘土帯の違いと考えられる。

ST024（第30図）調査区のC-2区で検出した。ほぼ完形の堀棺で、成人棺の下壙に、小児棺で使われる壙を上壙にしている。合口の堀棺墓であり、上壙と下壙は粘土に覆われていた。墓壙の入口は長さ1.12m、幅1.04m。深さ約0.6~0.82mあり、階段状のステップは確認できなかった。墓壙内には掘り直しのような跡が検出されている。主軸方位はN-15°-W、埋置角度は17°である。時期はKⅢb期の堀棺である。

出土遺物（第30図99、100）99は小児棺サイズの上壙で口径38.5cm、底径9.4cm、高さ34.9cmを測る。「T」字状の口縁を有し、口縁下に断面三角の突帯が1条巡る。外面は口縁部から突帯までを横ナデ、突帯から下はハケ目調整、内面はナデが確認できる。焼成は良好で、色調は橙褐色を示す。胎土には径1~3mmの砂粒を含む。100は口径44.2cm、底径12.1cm、高さ85.4cmを測る。逆「L」字状の口縁を有する。口縁部下には断面三角突帯が1条、胴部中位に断面四角の突帯が2条巡る。内面にナデがみられる。焼成は良好で、色調は橙褐色である。胎土は径1~4mmの砂粒が混じる。胴部上位には黒斑が確認できる。

ST025（第31図）調査区のC-2区で検出した合口の小児棺である。墓壙は、ST044と同じ黒褐色粘質土でありわからなかった。主軸方位はN-126°-Eで、埋置角度は47°であった。時期はKⅢc期の堀棺である。

出土遺物（第31図101、102）101は口径26.6cm、高さ約15.6cmが残り、逆「L」字状の口縁を有する。焼成は良好で、色調は橙褐色である。胎土には径3mmの砂粒が混じる。102は口径32.5cm、底径8.6cm、高さ37cmを測る。上壙と同じく逆「L」字状の口縁を有する。口縁部は横ナデ、外面に



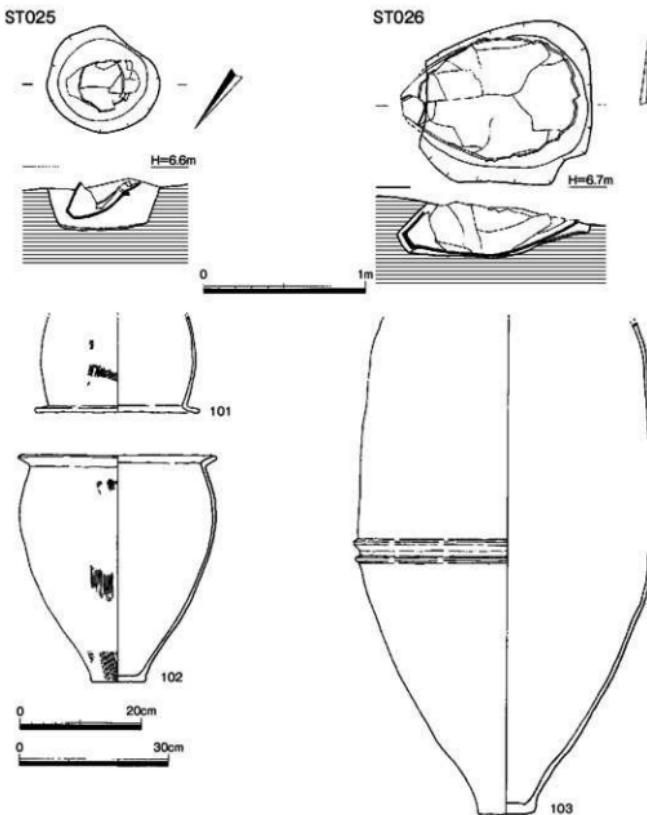
第30図 ST023・024実測図(1/30)および出土遺物実測図(1/10)

はハケ目、内面はナデが確認できる。焼成は良好で、色調は橙褐色である。胎土は径1~3mmの砂粒がみられ、内側に黒斑がある。

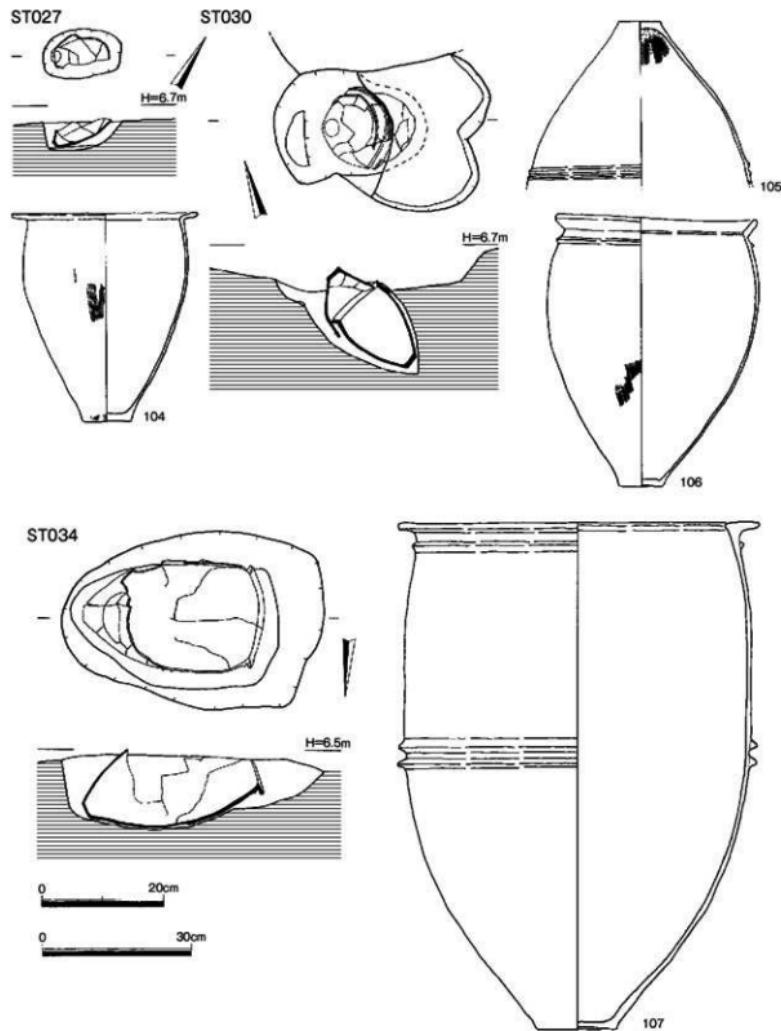
ST026 (第31図) 調査区のB-3区で検出した成人棺である。墓壙と喪棺は削平を受けており、深さ約0.33mが残る。主軸方位はN-88°-E、埋置角度は31°である。時期はKIIIa期の喪棺である。

出土遺物 (第31図103) 口縁部は削平により不明である。底径11.6cm、高さ100.2cmが残る砲弾型の喪棺である。胴部に断面方形の突帯が2条巡る。焼成は良好で、色調は淡橙褐色から橙褐色である。胎土に径3~8mmの砂粒が混じる。また、黒斑が上部と下部に確認できる。(『弥生人のタイムカプセル』福岡市博物館1998ではAタイプとしたものである。)

ST027 (第32図) 調査区のB-2区で検出した小児棺である。埋土は黒褐色土でST027の下にあるST042と見分けがつきにくかった。墓壙の長さ0.48m、幅0.3m、深さ0.19mが残る。主軸方位はN-59°-E、埋置角度46°を測る。時期はKIIIc期の喪棺である。



第31図 ST025・026実測図(1/30)および出土遺物実測図(101・102は1/8、103は1/10)



第32図 ST027・030・034 実測図(1/30)および出土遺物実測図(104～106は1/8、107は1/10)

出土遺物(第32図104) 口径約30.7cm、底径7.2cm、高さ34.1cmの小児棺である。逆「L」字状の口縁を有する。口縁部は横ナデ、外面にはハケ目が確認できる。焼成は良好で、色調は橙褐色である。胎土は径3～5mmの砂粒を含む。

ST030（第32図）調査区のC-2区で検出された小堀棺である。堀棺の一部が見えていたため堀棺墓と思われる掘削してしまったが、墓壙東側に深さ約0.2mの遺構が2つあった可能性が高い。堀棺墓を含めた3つの遺構の埋土は黒褐色土であった。墓壙は径約0.7mの不整形な円形で、深さ約0.6mである。斜坑が0.43mと深くそこから1段上がるところがある。主軸方位はN-73°-W、埋置角度は37°である。177次調査のST100と同じタイプであり、KIVa期の堀棺である。

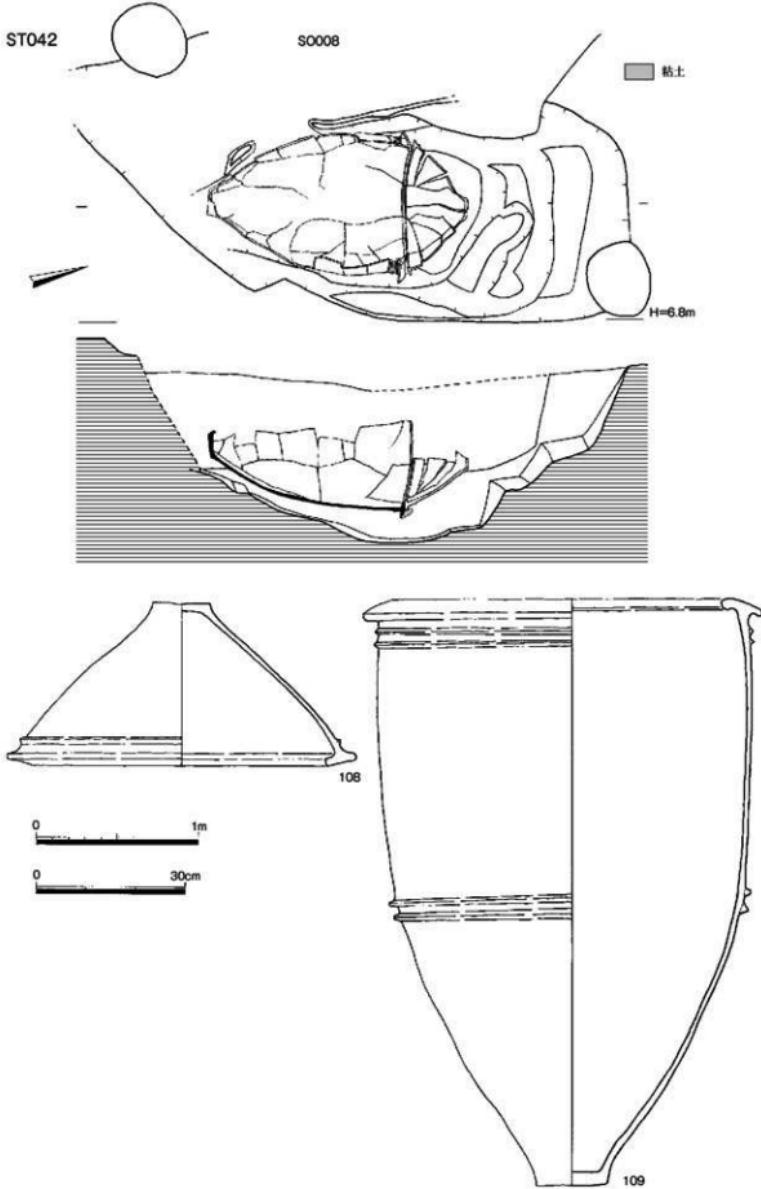
出土遺物（第32図105・106）105は底径8.5cm、高さ約33.5cmで、胴部上半部から口縁部を打ち欠いている。底部が厚く、胴部中位に2条の断面三角突帯がみられる。調整は内面底部にハケ目と指押さえ痕が確認できる。焼成は良好で、色調は明黄褐色であった。胎土には砂粒が混じり、外面に黒斑がある。106は口径40.2cm、底径8.3cm、最大径43.1cm、高さ54.3～55.5cmを測る。口縁の端部が上がる逆「L」字状の口縁を有し、口縁下に断面三角の突帯が1条ある。口縁部とその下の突帯までを横ナデ、外面にハケ目が残る。焼成は良好で、色調は淡黄褐色土である。胎土には砂粒を含み、黒斑が確認できる。

ST034（第32図）調査区のB-2区で検出した成人棺である。上堀が墓壙内には無く、単棺であろうか。上堀は確認できなかった。墓壙は1.11m×1.62m、深さ0.46mが残る。階段状に上がるタイプであるとみられる。また堀棺の口縁部が斜坑より飛び出して検出されている。主軸方位はN-87°-Eで、埋置角度は26°である。年代はKIIIb期の堀棺である。

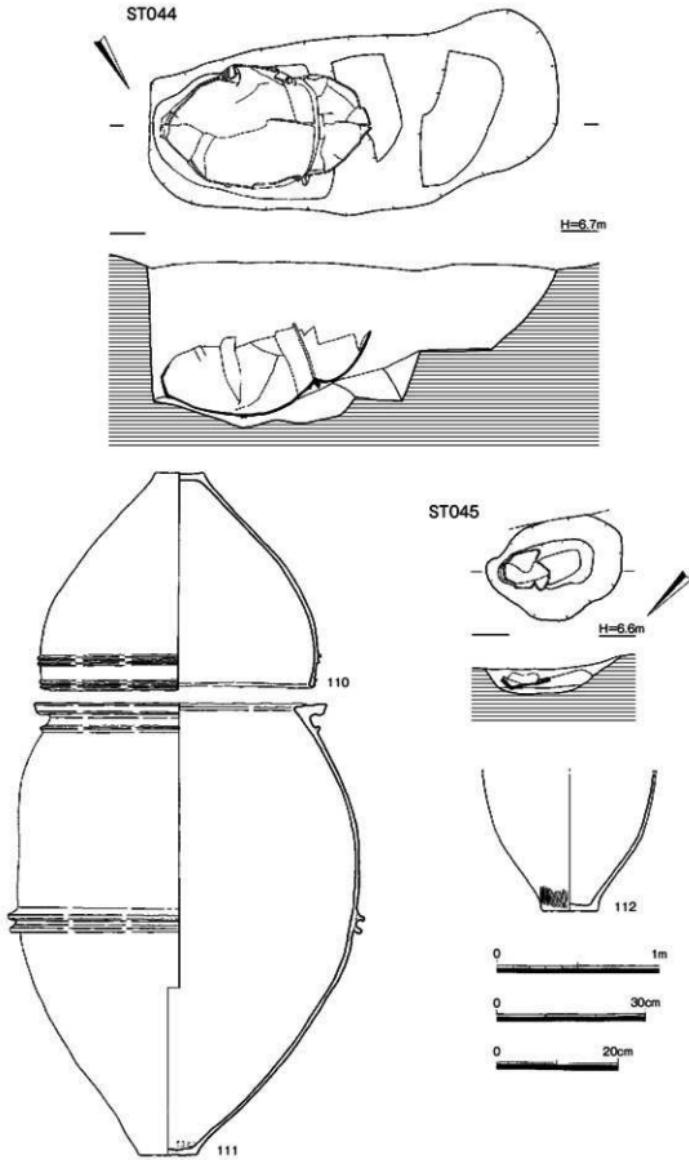
出土遺物（第32図107）107は口径74.0cm、底径16.4cm、高さ103.1cmを測る。「T」字状の口縁を有し、口縁下には突帯が1条ある。また、胴部中位やや下に2条の突帯を有する。底部は非常に薄く厚さ1.2cmである。砲弾型の堀棺であるが、胴部にかけて、やや膨らみがみられる。全体的に非常に薄い。調整は口縁から口縁下の突帯までと、胴部中位の2条突帯を横ナデ、それ以外をナデ整形が確認できる。焼成は良好で、色調は橙褐色土である。胎土には径5mmの砂粒を含み、黒斑が確認できる。

ST042（第33図）調査区のB-2区で検出した。180次調査で検出された堀棺墓では、一番大きな堀棺墓である。墓壙の西側の大部分をSO008に切られ、堀棺の上半分ほどが潰された状態で検出された。墓壙の幅は最大約1.35mを測り、下堀の底部方向で幅は減少している。深さは、最大で約0.94mが残る。墓壙は階段状に掘られており、1段0.2m～0.42mの段が連なり、階段状に上り下りするタイプである。墓壙の床面は、下堀に沿うように掘られており、下堀の底部方向ではうえに上がる。上堀は階段部分に置かず、粘土により上堀と下堀を密着する。主軸方位はN-16°-Eで、埋置角度は0°である。年代はKIIIa期の堀棺であり、今回調査した中で最も古い。

出土遺物（第33図108・109）108は鉢で口径71.3cm、底径11.4cm、高さ32.8cmを測る。口縁は「T」字状の口縁を有する。内外に口縁が発達し、端部に向かうにつれてうえに上がる。口縁の上には1条、断面三角の突帯が巡る。調整は口縁部と下の突帯を横ナデ、胴部はハケ目の後にナデ消している。焼成は良好で、色調は橙褐色土である。胎土には径3mm程の砂粒を含み、外面の底部と胴部内面に黒斑が確認できる。109は口径82.2cm、底径14.8cm、高さ119.7cmを測る。口縁は「T」字状の口縁を有し、内外に口縁が発達し、外側は端部に向かうにつれて下に垂れる。口縁の下には2条の断面三角形の突帯を有する。突帯は体部の中ほどや底部よりも2条の突帯がある。この突帯は口縁部付近の突帯とは違い、断面がコ字形突帯に近い。胴部上半は直立し、調整は口縁部と突帯部分を横ナデ、それ以外はハケ目の後ナデて、ハケ目をナデ消している。焼成は良好で、色調は橙褐色である。胎土には径3mm程の砂粒を含む。黒斑は上下対に2か所確認できる。



第33図 ST042 実測図 (1/30) および出土遺物実測図 (1/10)



第34図 ST044・045実測図(1/30)および出土遺物実測図(112は1/8、他は1/10)

ST044（第34図）調査区のC-2区で検出した。墓壙の大きさは幅約1.1m、長さ2.52mの隅丸長方形で、深さは現状で1.04mである。墓壙には高さ0.3m程のステップが付き、階段状に上り下りする。上壙を階段のステップに立てかけるように埋葬している。主軸方位はN-58°-Wで、埋置角度は15°である。年代はKⅢb期の壺棺である。

出土遺物（第34図110・111）110は壺の口縁部から胴部を打ち欠き壺棺の上壙として使用したものである。底径10.0cm、高さ43.4-44.2cmが残る。胴部中央を断面M字突帯が2条巡る。打ち欠いた箇所はM字突帯のすぐ下である。内・外ともにナデ調整が確認できる。焼成は良好、色調はにぶい橙褐色から明橙褐色である。胎土に径2mmの砂粒を含む。111は口径60.0cm、底径12.0cm、高さ90.8cmを測る。口縁下に突帯が1条巡る。また、胴部中央には2条の突帯が巡る。調整は口縁部から突帯までと胴部中央の突帯を横ナデが確認でき、それ以外は器面がやや荒れるがナデ調整である。焼成は良好で、色調は橙褐色である。胎土に2-3mmの砂粒を多く含む。黒斑が2か所確認でき、1か所は底部から胴部中央に広くみられ、もう1か所は反対側の胴部中央より上に確認できる。

ST045（第34図）調査区のB-2区で検出した。ST045の上部をST013が切る。ST013を取り上げた際に検出された壺棺で胴部から口縁部が欠損している。SD001には壺棺片が大量に含まれており、ST013も同じく流れ込みの可能性も考えられる。一部擾乱により消失しているが墓壙の大きさは0.84mの楕円形と考えられ、深さは約0.16mが残る。主軸方位はN-134°-Wで、埋置角度は44°である。

出土遺物（第34図112）底径8.8cm、残存高さ22.3cmを測る。調整は外面の底部付近にハケ目が確認できる。焼成は良好で、色調は黄褐色である。胎土に径1-5mmの砂粒を含む。

#### 7) その他の遺物

最後にピットから出土した遺物について報告を行う。113はSP003から出土した須恵器の坏である。114はSP021から出土した瓶の把手である。115はSP036から出土した須恵器の坏でヘラ記号が確認できる。

### 3. 小結

今回の調査では溝（SD）2条、井戸（SE）1基、土坑（SK）4基（SK012は落とし穴の可能性が高い）、方形周溝墓（SO）1基、土坑墓・木棺墓（SR）はそれぞれ1基、壺棺墓（ST）17基を検出した。隣の那珂177次、180次の平板測量のみ行った箇所では竪穴住戸が検出されているが、180次の調査区内では竪穴住居跡は確認できなかった。

溝は江戸時代（SD001）と古代（SD020）が確認された。また、井戸は古代の時期が想定されるが、遺物は非常に少なかった。

方形周溝墓（SO008）は周溝のみが発掘され、平板図を取る際にも主体部は確認できなかった。削平されてしまったか、発掘調査範囲と平板で図面を取った範囲の間である可能性もある。調査範囲と平板図の間は掘削する予定はないということであったので平板図は作成しなかった。

木棺墓（SR019）は方形周溝墓に切られており、底面のみ検出できたが、勾玉等の玉類がみつかっている。また土坑墓（SR028）は1段塗んだ箇所にある。土坑墓の上部は黒褐色粘質土が堆積しており、3-4cmを掘り下げる過程で検出した。また、窪みに沿うように粘土が検出されており、木蓋の可能性が想定できる。

壺棺墓は17基検出（表3）され、177次調査を含めると29基みつかっている。17基のうち成人棺は10基検出された。那珂遺跡群において、一つの墓域であったのであろう。壺棺墓が検出された最も古いものでKⅢa（ST005、042）であり、177次調査の成果ではKⅢbが最古であり、KⅢa期

遺構番号(上巣、下巣)	成人棺 / 小児棺	規模(底径・口径・高さ)	胎土	主軸方位	埋置角度	時期	墓域
ST004	成人棺	7.8cm・—・—	橙褐色	N-8°-W	8°	—	—
ST005(上巣)	成人棺	(16.2cm)・(45.3cm)・70.1cm	淡黄褐色	N-51°-E	—	K III a	I類
ST005(下巣)	成人棺	—・72.8cm・—	暗棕褐色	—	—	—	—
ST006(中巣)	成人棺	—・75.6cm・—	棕褐色	N-22°-E	0°	K III b	I類
ST006(下巣)	小児棺	—・30.6cm・—	棕色	—	—	—	—
ST011	成人棺	11.6cm・44.2cm・85.3cm	淡棕褐色	N-58°-W	44°	K III b	—
ST013	小児棺	9.8cm・—・—	棕褐色	N-173°-W	34°	—	—
ST014	小児棺	9.8cm・—・—	淡黄褐色	N-177°-E	39°	K IV a	—
ST018	小児棺	9.0cm・—・—	明棕褐色	N-140°-W	36°	—	—
ST023(上巣)	成人棺	10.8cm・46.0cm・—	黄棕褐色	—	—	—	—
ST023(下巣)	成人棺	26.0cm・65.0cm・96.0cm	棕褐色—明黄褐色	N-66°-W	34°	K III b	I類
ST024(上巣)	小児棺	9.4cm・38.5cm・43.9cm	棕褐色	—	—	—	—
ST024(下巣)	小児棺	12.1cm・44.2cm・85.4cm	棕褐色	N-15°-W	17°	K III b	II類
ST025(上巣)	小児棺	26.6cm・—・—	棕褐色	N-126°-E	47°	K III c	II類
ST025(下巣)	小児棺	8.6cm・32.5cm・37.0cm	棕褐色	—	—	—	—
ST026	成人棺	11.6cm・—・—	淡棕褐色	N-88°-W	31°	K III a	—
ST027	小児棺	7.2cm・30.7cm・34.1cm	棕褐色	N-59°-E	46°	K III c	—
ST030(上巣)	成人棺	8.5cm・—・—	淡黄褐色	N-73°-E	37°	K IV a	II類
ST030(下巣)	成人棺	8.3cm・40.2cm・54.3～55.5cm	淡黄褐色	—	—	—	—
ST034	成人棺	16.4cm・74.0cm・103.1cm	棕褐色	N-87°-E	26°	K III b	I類
ST042(上巣)	成人棺	11.4cm・71.3cm・32.8cm	棕褐色	N-16°-E	0°	K III a	I類
ST042(下巣)	成人棺	14.8cm・82.2cm・119.7cm	棕褐色	—	—	—	—
ST044(上巣)	成人棺	10.0cm・—・—	棕褐色	N-58°-W	15°	K III b	I類
ST044(下巣)	成人棺	12.0cm・60.0cm・90.8cm	棕褐色	—	—	—	—
ST045	小児棺	8.8cm・—・—	黄褐色	N-134°-W	44°	—	—

第3表 那珂遺跡群 180次調査出土甕棺一覧



第35図 ピット出土遺物実測図(1/3)

から甕棺墓の墓域であったことがわかる。一番新しいものでK IV aに分類できる。また主軸方位は一定ではない。

成人棺10基のうち確実に上巣があったものが5基検出された。成人棺のうち、時期がわかる甕棺は9基あり、ST005、042はK III a、ST006、011、023、024、034、044はK III b。K III cに分類できる甕棺は小児棺(ST025、027)のみである。ST0301はK IV aであった。

177次調査で墓域と生活域の違いについて述べたが、180次調査で、弥生時代・古墳時代の遺構は甕棺墓・木棺墓・方形周溝墓をはじめとした墓のみであった。次章で述べるが、177次調査の生活域と墓域の境目が180次調査の東側にあるように考える。次に遺構が確認できるのは古代の井戸であり、やはり墓域と生活域は分かれていたのではないかと考える。

## VI. 結語

那珂 177 次調査・180 次調査の壺棺墓について

那珂 177 次調査では 12 基（成人棺 6 基）、180 次調査では 17 基（成人棺 11 基）の壺棺墓がまとまって検出されている。時期は、両調査共に K I a から K III c である。結語では混乱を避けるために 177 次調査の壺棺は アミ掛け をする。また、両調査とも小児棺には棒線を引くものとする。

墓壙 墓壙は縦坑を掘った後、横に掘り進めるとされる。今回の二つの調査で見られた壺棺墓の墓壙を大きく 2 つに分類する。

I 類：地表面から墓壙内へ階段状に下に降り、壺を据え付ける。

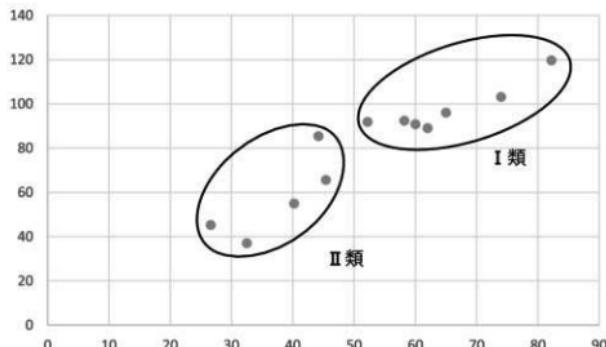
II 類：地表面から墓壙底部までを 0 段もしくは 1 段で降り、壺を据え付ける。

I 類に該当するものが ST032・043・062・074、ST005・006・023・034・042・044、II 類は ST100・024・025・030 であった。（表 2、3）I 類とした壺棺は成人棺が多く、II 類とした壺棺は成人棺でも小型の壺棺と小児棺が多い。グラフにまとめたものが表 4 である。縦を下壺の高さ（cm）、横を下壺の口径（cm）で分類している。I 類と II 類では壺棺に明らかな差が確認できた。I 類の壺棺の多くは大きく、大きくなればなるほど重くなり、持ち運ぶのに人数がかかると考えられる。そうなつた時、I 類の様に階段状に掘ることで、壺棺を墓壙内に挿入しやすくなるのではないだろうか。大きい壺棺は、II 類の様に墓壙内との差が大きい場合は挿入しにくくみられ、また、割れる可能性も出てくる。壺棺が小さい場合は、II 類の様に縦に掘ってもそれほど壺棺の重さはなく、少ない人数で壺棺を設置できたのではないだろうか。

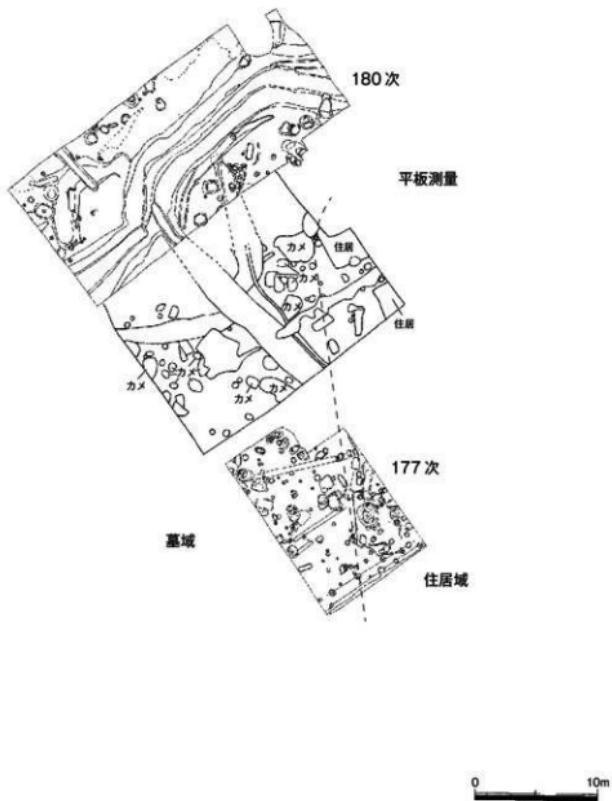
今回の 177・180 次調査では合計 29 基の壺棺墓が出土したが、K III a 以降の壺棺しか出土しなかった。K III a 以前の壺棺墓の墓壙がどうであったかは、また別の機会に譲る。

那珂 177 次調査・180 次調査出土の墓域について

177・180 次調査と平板測量を行ったもの（第 36 図）を見ると、土坑墓・壺棺墓・方形周溝墓といつた墓域は西側、掘立柱建物・堅穴住居といった居住域は東側に分かれている。削平を受けている可能性もあるが、くっきりと分かれる。時代の流れは土坑墓・壺棺墓→掘立柱建物・堅穴住居→方形周溝墓となっている。あらかじめ、墓域と生活域が設定されていたのではないだろうか。



第4表 那珂遺跡群第 177・180 次出土壺棺法量



第36図 那珂遺跡群第177・180次調査および平板測量図(1/400)

# 図 版



177 次調査作業風景



180 次調査作業風景





(1) 第177次全景(上空から)



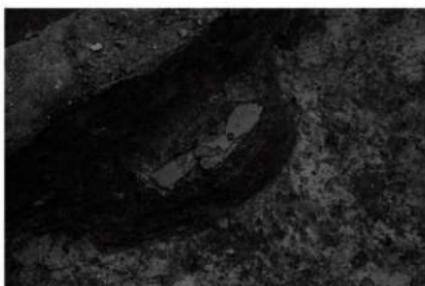
(2) 第177次南側全景(東から)



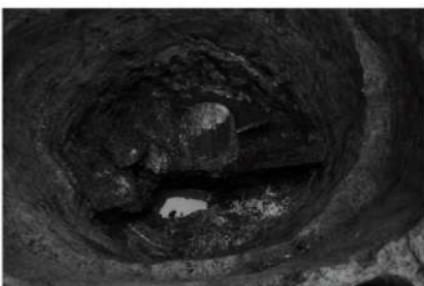
(3) SB068(西から)



(4) 積穴住居出土状況(上空から)



(5) SC040石包丁出土状況(南東から)



(6) SE039遺物出土状況(東から)



(1) SE039 (東から)



(2) SK025 (東から)



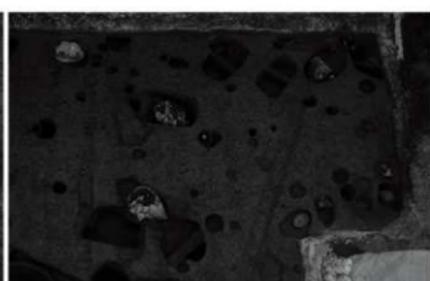
(3) SR051 (南から)



(4) SR052 (東から)



(5) SR057 (東から)



(6) 瓢棺墓 (上空から)



(1) ST028 (東から)



(2) ST032 (東から)



(3) ST043 (東から)



(4) ST062 (北から)



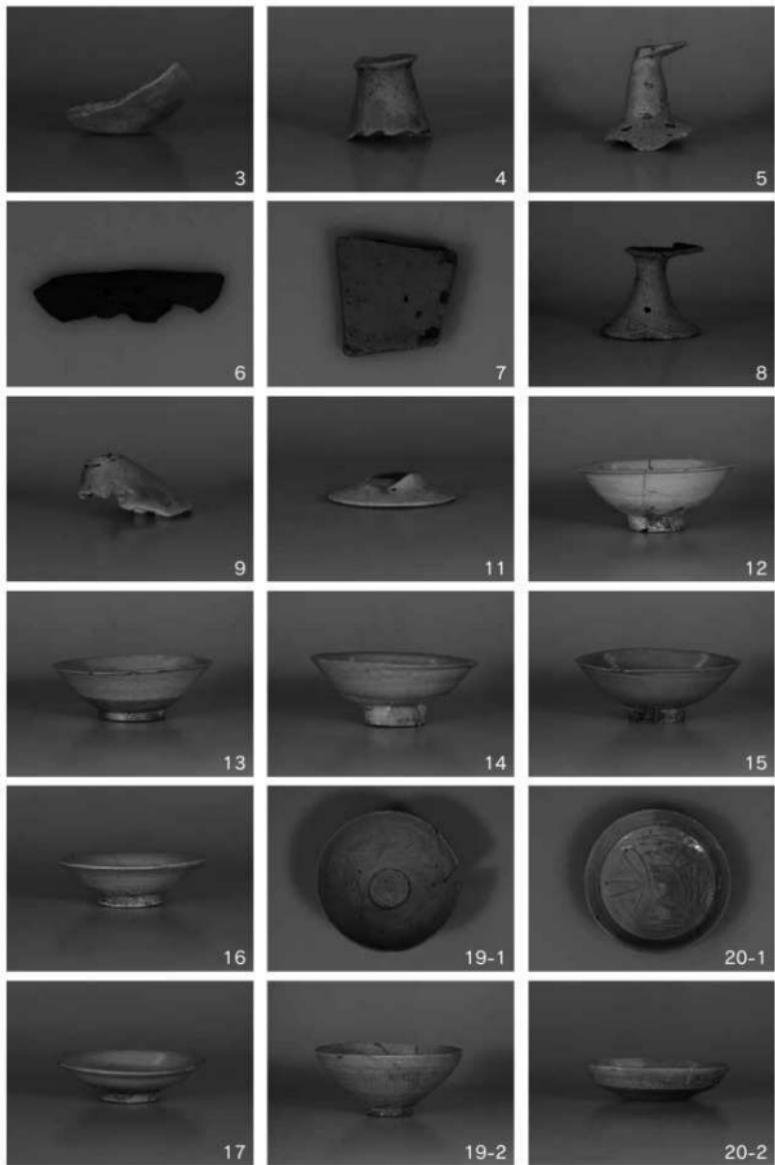
(5) ST087 (西から)



(6) ST100 (西から)

図 版4

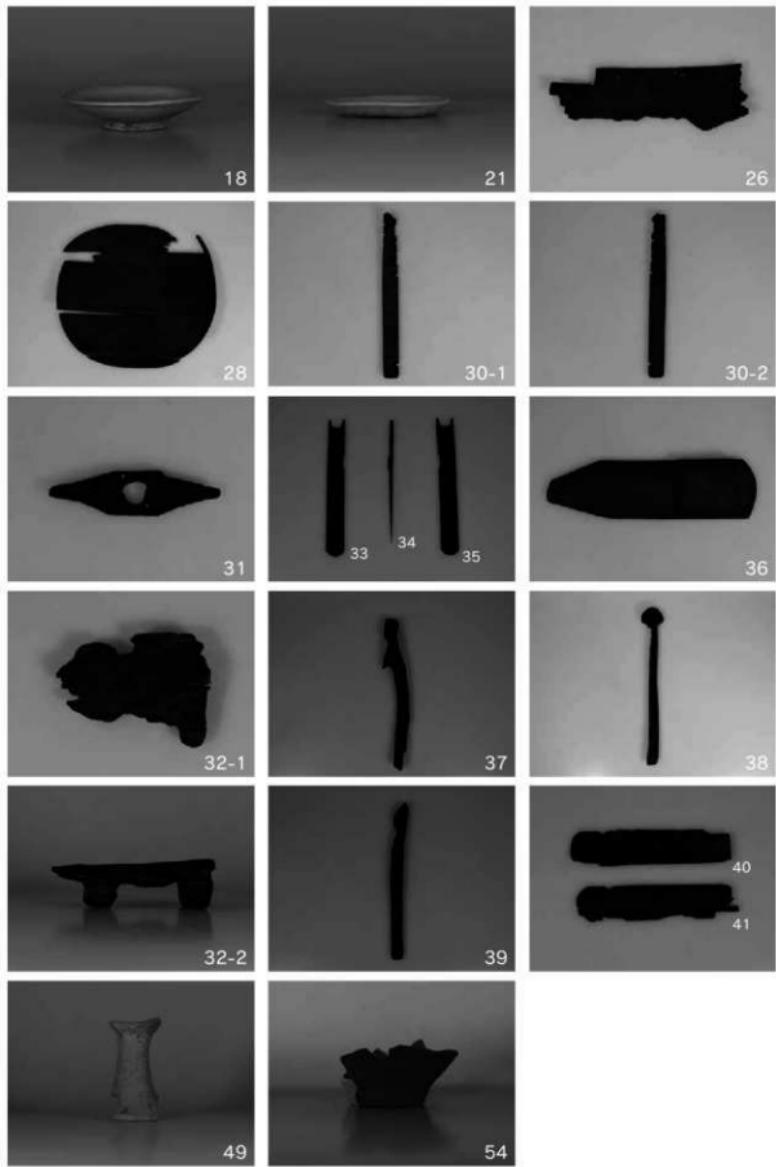
第177次調査



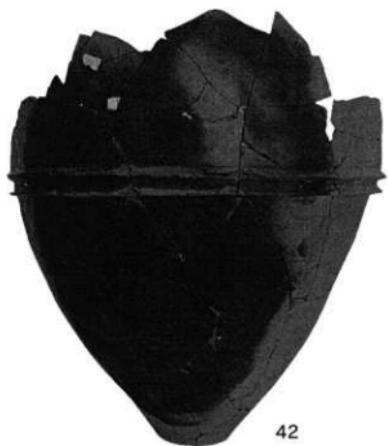
出土遺物（1）

第177次調査

図 版5



出土遺物 (2)





48



53



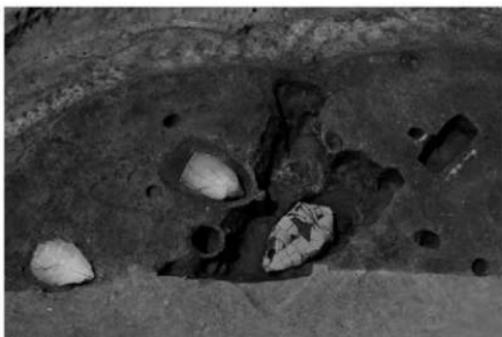
57



56



(1) 第180次全景（上空南から）



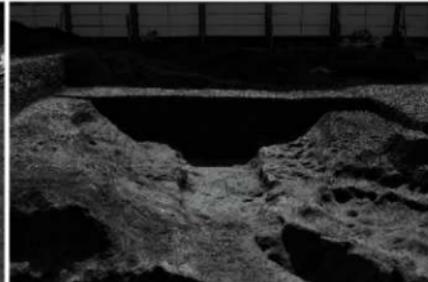
(2) ST026・034・042  
(上空南から)



(3) ST006・023・024・  
030・044 (上空南から)



(1) SD001A 断面（東から）



(2) SD001B 断面（東から）



(3) SD020 断面（南から）



(4) SE007（東から）



(5) SK012 断面（北西から）



(6) SO008（上空南から）

図 版 10

第 180 次調査



(1) SO008A 断面（南から）



(2) SO008B 断面（西から）



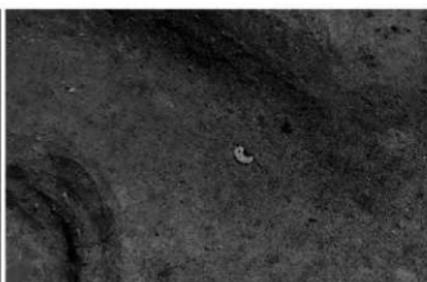
(3) SO041 (北から)



(4) SR019 (東から)



(5) SR019 勾玉出土状況（西から）



(6) SR019 勾玉出土状況（南西から）



(1) SR019 管玉出土状況（西から）



(2) SR028（東から）



(3) ST004（南から）



(4) ST005（西から）



(5) ST006（南東から）



(6) ST006（北東から）



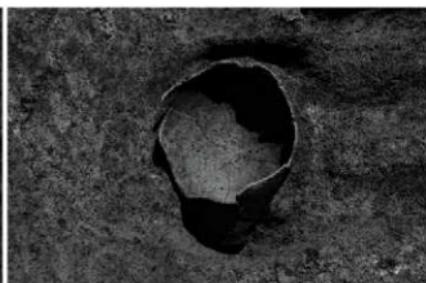
(1) ST011 (南から)



(2) ST013 (北から)



(3) ST014 (北から)



(4) ST018 (東から)



(5) ST023 (北東から)



(6) ST024 (西から)



(1) ST025 (東から)



(2) ST026 (東から)



(3) ST030 (南から)



(4) ST034 (南東から)



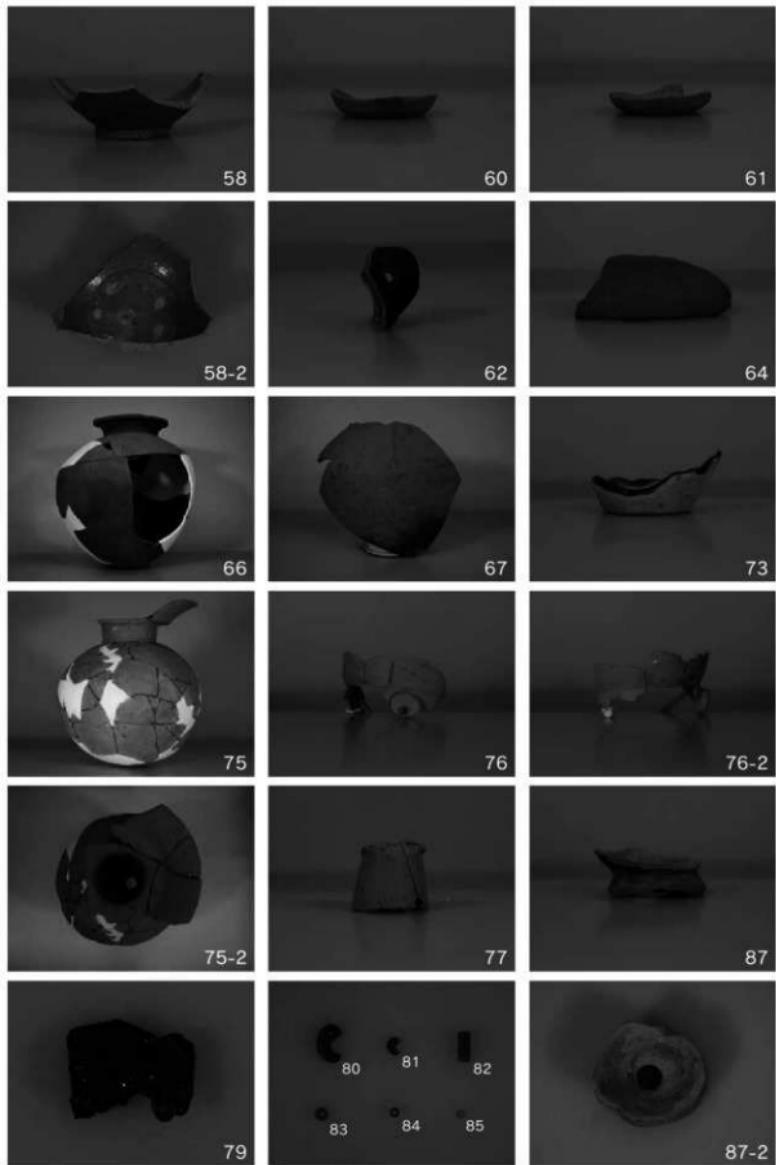
(5) ST042 (東から)



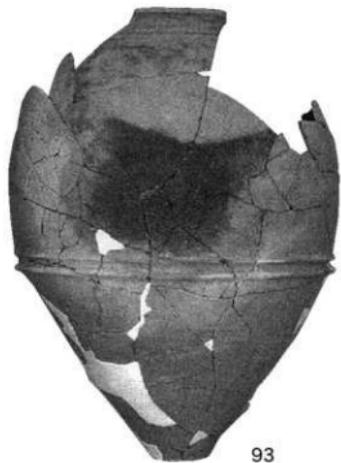
(6) ST044 (北から)

図 版 14

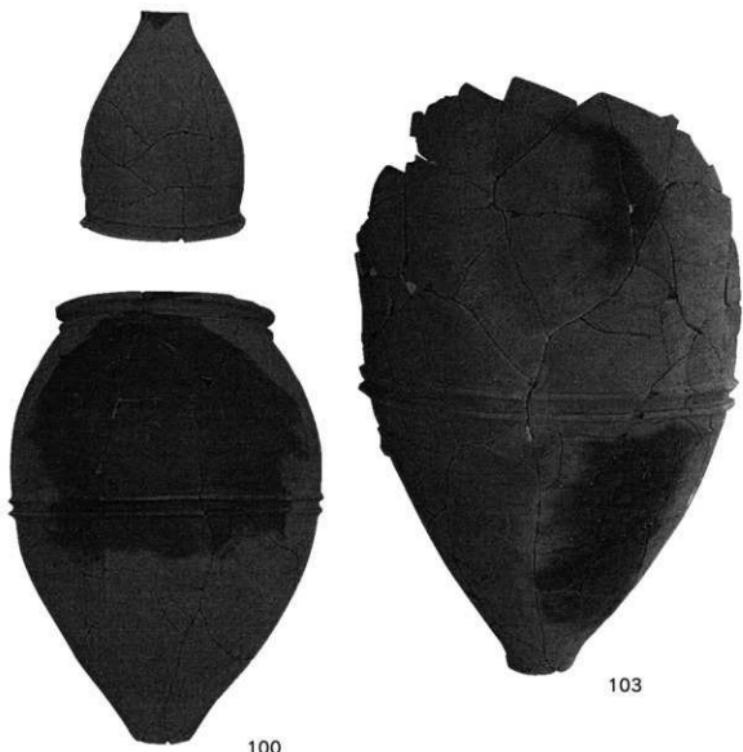
第 180 次調査



出土遺物 (1)



出土遺物（2）



出土遺物 (3)



107



97



105



106



98



108



110



109



111

## 報 告 書 抄 錄

## 那珂 84

—那珂遺跡群第 177・180 次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1442 集

2022 年（令和 4 年）3 月 24 日

発 行 福岡市教育委員会  
福岡市中央区天神 1 丁目 8 番 1 号

印 刷 株式会社谷口印刷所  
福岡市東区馬出 2 丁目 22-23